特別
イ4
1919
693

雜纂

山陽翁の遺事
幾有不朽焉

秋宮の少曲

柳侍遺稿

門イ4
1919
巻 ~~78~~
693

門イ5
~~1380~~
巻 66

昭和十六年十一月一日寄
市島謙吉氏贈

山陽翁の肖像

南山人

『君書餘情』に翁の肖像を載す、依て摸寫して此に掲ぐ、彼の有名ある翁の自賛は實に斯肖像に題せしものあり、今ま見に頼家に於て之を藏す、賛は何人も知る所ありと雖、序あれば左に録す。

身偃仰一室。而〻關百世之失得。弗恤已殘蘆。而憂人家國。文章滿腹。不補乎饑。曲尺直尋。則所不爲。噫是何物迂拙男兒耶。雖然。烏知無念此迂拙者時乎。

此膝不屈於諸侯。聊答故君之德。此眼竭之於群藉不虛先人之嚬。此腳侍母輿。二蹐芳山。三棹大湖四上下溪灣。而未曾踵朱頤之門。此口不飴殘杯冷炙而此手欲援黔黎之寒餓也。

尙ほ序に頼家の略系を掲げん、

亨翁 藝州竹原人

- 春水 仕藝藩 ― 山陽 病廢
- 春風 嗣亨翁業醫 ― 元鼎 以山陽病廢爲春水子
- 杏坪 仕藝藩 ― 采眞 仕藝藩
- 聿庵 以山陽病廢元鼎亦殤沒嗣祖仕藝藩 ― 誠軒 仕藝藩
- 支峰
- 三樹
- 古梅

◎山陽翁の逸事

余が曩日讀者に約せる『君藩餘情』は此程到着せり此れは明治廿五年六月十九日、山陽翁の鄕里の人人が翁を祭りし時の祭文詩歌を集めて上梓せるものあり、其の中に河野小石といふ老人が翁の遺事を演說せる筆記あり、未だ世に傳へざるの逸話も少からざれば、其全文を茲に轉載するとせり、

諸君今日は私に山陽先生の遺事の御話を致す樣にと云ふことでムりますが、私さ老年でもムりますし、聲も低ふムりますし、且又聾が惡しくムりますからヒヨツトしたら餘計の御話をしたり、肝要のことを落すかも存じませんから、其御心持をして御聞取りを願ひます、ソシテ私が先生の遺事を申すについて、中には能く履歷を御承知あい御方がムりましようから、履歷を一ト通り御談致しまして、后に遺事に及びますのでムります、其の履歷と申す者は山陽先生の御弟子に江木鰐太郎と云ふ人がムります、此の人が先生の行狀を書いて置かれましたが、之に就きまして落のない樣に述べようと存じますするが、此先生の行狀を御讀あさつた御方は、餘計あることを御聞きなさるでムりまするから、先きに一應御聞りを申して置きます、ソコデ先生は諸君も御承知の通り、賴春水先生と申す人の御長男でムりまして、安永九年に大阪の江戸堀と云ふ處で御生れあさつて、其の翌年先生が二ツ子の時に、親御が元の藝藩淺野家に聘せられた時に、矢張附添て此地に御出にありましたので。ソレで先生は二ツの歳から當處で育てられあさつた御方でムります、今を距りますると丁度百十三年前でムります、然る處、先生は御幼少の時より、通常の人とは御違ひあさつた者と見ゐまして、其母樣は大阪の飯岡義齋と云ふ人の娘でムりまして、其の御名前は梅颿夫人と申す人でムります、此人には私は御交際申たことがムります此御方が御病氣の時に看病を致しましたに依て、梅颿樣から御話を聞きましたことがムります、夫れに就きまして、江木の行狀中に、先生が六ツの御年に、庭で御一人天をあがめて御辞儀をして御出にありました處が、ドーゆう積りでムいましたか、内に這入て、親御に向ひ天と云ふ者はドーしたものでムりますかと云ふことを聞かれましたと云ふことでムります、之れが先生の六ツの御年でムります、今頃の人に依て考へますするに、六ツの年に天のことを問ふは實に不思儀でムります、處が梅ムム夫人と云ふ御方が答へられまするに、天と云ふ者は始終運轉して日夜止まらずに廻り詰て居るものじやと云ふことを申されましたら、先生が聞かれますると再ひ天をあがめて半時計り泣て居られましたと

云ふとで御座ります、其所以は分りませせんが、天は不思議な者であると云ふて大變不思議がられたと云ふとまでは分ります半時計りもあがめてドーも不思議な々々なぞと云ふて居られたのでムります、察して見まするに其天の運轉して日夜止まぬと云ふとに付て、自分にも何にか考へがムりましたか、人として何でも働き切らねばならぬ者と云ふ感念を起されましたか、または何にもソーユー事は分らず、只だ不思議じやと云ふ丈の感念を起されましたか、其程は分りませんが、何分に夫れが丁度六歳の御年の時でムりましたには違ひムりません、夫で私は梅颿夫人の看病をして居りました頃に、不意と何故でムるかと尋ねました處が、夫人は笑ふて申されまするに昔のとであるからお前がソー云ふて問ふても私も覺がないと云はれましたが、先生の不思議を現はされた始めてムります

夫れから先生が十三の御年におられてから、即ち寛政四年の子の歳でムりました、親御の春水先生が江戸へ詰めて居られましたときに詩を送られました、其詩は山陽の詩としては此上もなき結構な詩とは申されませぬが、兎に角十三歳の時造られた詩にしては實に妙じやと云ふので、山陽詩抄の始めに載て居ります、十有三春秋、逝者已如水。天地無始終。人生有生死。安得類古人。千載列青史。此詩に依て考へまするに。其頃より千載青史に列して名を後世に留めたいと云ふ念慮がムりましたと存じます、夫れを送られますと、其頃丁度東京に紫野彦輔栗山先生と云ふ博士が居られまして、エライ賞嘆致されて嗚呼春水には實に善い兒がある、此子を只詩文を作る丈けの考へにて育てる積りてあるか、又は歴史を讀ませて古今の治乱に通じさせる積りであるか、ドーゾ治乱のとを知らせ度と申されて、此事をば薩摩の赤崎元禮と云ふ儒者が國元へ歸りがけに廣嶋に立寄りまして柴野かソー云ふたと云ふとを先生に傳へました、夫れから先生は如何にも詩文のみではイケなかい、夫れで足れりとする者ではないと云ふて、通鑑綱目を讀まれました、之れが歴史學に入られました始てゝムりますが、ソレは支那の歴史を讀ましたのてムります、其前のとを梅颿夫人より聞きまするに六ツの頃から文章と日本の歴史が大變好きで、大平記列祖成蹟なぞ其外種々の歴史を見て日々御遊にあッたと云ふとを私に申されました、夫れで日本のとが大變に御悲しいのでムります、然る處が十三歳よりヒドく勉強を致されまして、名を後世に留めたいと云ふ意氣込で讀み居られます書物の中に『汝草木と同じく朽ちんと欲する乎』と云とを小切へ書かれまして、書物を讀で倦む度毎に夫れを叩て高からかに讀み居られたと云ふとを申し居られましたが、ソレで其御志を見るに足ります、處が大變に勉強を致されまして、遂に眼病に取遭れましたて、親の春水先生も殊の外氣遣はれまして、ドーか讀書を止める樣にと止められましても、ドーしてもやみませんから、夫では夜讀む丈ありともやめる樣にと仰せられて、夜讀もやみませんから、後には春水先生が油さへあければ讀むとは出來んと云ふので、油をば少しも與へなかッたと云ふとでムります、之を以て見ましても非常に勉強をして居られたと云ふとが想見らまれする、ソコで山陽先生が常に人に向て申されましたとがムります、それはズッと後のとで、四十年にもなられました時の話でムりますが、己を天下の者がアレは才子である生れ付きの學才があると云ふて呉れる者がある、實に迷惑な評判である、己が才子であると云ふ者はオレを知らぬ者が云ふのである、己は勉強刻苦に依て此處までに至ッたのである、己には生れ付きの才はない者であると云はれました尤も六歳の時より天のとを問ふと云ふ樣な御方でムりましたけれども、決して生まれ付き計りではムりません、勉強刻苦の力を以つて斯くなられたのでムります

夫れから寛政九年丁度先生の十八歳の時でムりました、叔父の頼萬四郎と申しまして名高い杏坪先生が藩の用務を帶びて殿の御伴をして東京に上られました、其時に山陽先生伴をして行かれました、ソーして尾藤良助と云ふ人の開て居られた塾に這入られまして一年計り經て歸られましたが、東京へ出られたのが前後の内に只夫れ丈でムります、ソレから其後文化七年におりまして、故あッて當所を去られましたのでムります、之は實に行狀の中にもムりません、又世の人も知りません、放蕩無頼で何の譯もなしに脱走せられたと云ふ人がムりますが、之には深い譯がムります、之は杏坪先生が云ふて居られましたから、古い人は御承知でムりましよう、私は粟原道龍と云ふ人より聞きましたとがムりまして、世の人に知て貰ひたいのが萬々でムいますけれども、ドーも夫れを說くとに忍びません、コーやッて御話をする内にも感涙する次第で、先生が申譯に申されたるは自分は多病にして官途のとに堪へませぬと云ふ名儀で當所を立たれたのでムります、此事に就きましてドーか私が聞きました丈のとを御話せんと思ひまするとも、只今も申す通りコーやッて御話を申す中にもはや涙が落つる樣な次第でムりまするから、ドーか諸君におきましても暫く故あッて當所を去られ

たと見て下され、如何に説かんと思ひましても感涙にむせびて説くに忍びませぬ、夫れから當所を距られて福山に茶山先生が居られました、此先生は親の春水先生の御友達でムりますから、此處に立よられましたか、ドーかヲレの處の塾生の監督に來て呉れまいかと云ふて頼まれ、此處に暫く滯留てムりました、ソコで福山に參られましたのでムりますが、其時が先生の三十一才の時で、其年が當所を去られた年てムりますが、茶山の塾に一ヶ年計り居られましたが、是れは乾度遺事に屬します、其間に親の春水先生並に叔父の杏坪先生の両人が、山陽の身上を大變に氣遣はれて、あの様なとで西京へ行くと云ふが實に危い事てある、ドーか當地の近傍に足をとめさせて貰ひ度いと云ふと、春水先生、杏坪先生と連名にて茶山先生の處に、ドーかしてお前の國に足を止めさせて呉れいと云ふて頼まれまして大變なる氣遣ひてムりました、それは外史と云ふものに關係があるからでムります、此外史と云ふ本は先生の十八才のときに思ひ立れて、十年間で脱稿をしまして、それから跡を小直をするに十年計り掛りまして、前後二十年も掛りましたのでムりますが、當所を出と云ふものはドーか外史を自分の思ふ通りに充分な

る書物にしたひと云ふの念慮でムりました。ソレで春水、杏坪両先生が氣遣れたのでムります。外史と申す本は幕府の盛なるときに拵へられたので幕府を排擊してありますから、元が王室の式微を憂ひて作られたる書でありますから、幕府の氣に入らぬとは段々ムりますそれ故幕府から其事に手を入れまして草稿なぞを探索して燒捨ると云ふこともムりました、併し茶山先生に頼まれました手紙には夫れとはムりませんが、何分にも危ふ思ふから、ドーぞ茶山先生の處に止めて呉れと云ふとでムりました、それが先生の三十一才の時の事でムりました、其時福山にも實は先生を抱へたいので、ドーぞ福山に仕へて呉れぬか、尤も廣嶋を多病と云ッて去たのであるから、頼と云ふ姓を名乘ては都合が惡いから、養子分で姓を換へてドーか福山に仕へて呉ぬか、併し廣嶋は四十二萬石、此の福山は十萬石であるから、行くのは不滿足であろうが、主君は十萬石でもお前には乾度好い祿を與へる積じやかと云ふとを、茶山先生が云はれましか處が、山陽先生はイヤ私は多病で官途に堪へないから、父母の國を去りましたのでムりますから、此處へ仕へるとは致しません、此處へ仕へるとが出來まするなら、我廣嶋へ歸ッて仕へまする、私

は祿の多は決して論じませんが、第一に他人の姓を名乘ると云ふとが良心に耻づるので自分は不愉快でムりますると云て開かれず、是非共上京すると云はれるより、親の春水先生も之れではドーも自分にはイケナイと云ふ處よりして、當時執政太夫築山大藏と云ふ懇意なる方か居られまして、其人に頼まれまして其人より茶山先生に頼みがムいまして、ドーか止めて呉れーと云ふとになりました、其時山陽先生が築山に當て送られました手紙がムります、其中に私が西京へ出ると云ふのは今の武家の事か慷慨に堪へないから武家の手本になる處の書物を仕上たいのである、私が國を去りまするは田舍では引用の書物かないからである、親や叔父の氣遣は老ての過慮と申す者で、私も青表紙の少々はかぢッて居るから親や叔父に禍の罹る様なとはせぬから安心して下され、そしてドーぞ此の書物を拵へたいか若しわきへ仕へると此の書物は他國で出來たとになる故に、浪人者で居りさへすれば此の書は廣嶋で出來たのであると云ふから、仮令奉公はせぬとても元旦那に奉公するも同様であるから完全なる書物を拵へて御恩に報すると云ふとでムりまする、實に愛國心に厚い人であると云ふてとは此等に依ッて見ても分りまする、

それから遂に三十二年に西京に出られてから、亦た外史の事がもめ出してドーも幕府から八ヶ間しく言ふていけません、ソコでエライ嘆息せられました、其頃は皆な寫本計りで版本はムいませんから、是れはドウでも原稿を取り上げ燒き捨るに違ひない、夫れでは自分の是まで半生の心血を濺ぎ辛抱をして拵へたものを灰にして貰てはならぬ、夫れでは大變因ると云ふ處より、嚴嶋の大聖院の寶物庫に納めて置たならば灰にせらるゝと云ふ災はあるまい、コンナ物でも後世に及べば又世に出るとがあろうと云ふて、該寺に持て行きて納めて置かれたと云ふことでムります、夫れに就て御話がムりまするが、外史の体裁に付きまして先生に不似合の事がある其組織大變不都合なる處かあると云ふ論が起りました、此外史の組織が惡いと申すのは、豐臣傳と云ふ者を將軍傳の中に書かずに徳川の前記としてある故、山陽先生はなぜ豐臣をば將軍傳の中に入れないかと問はれたら豐臣は關白にはなッた人であるが將軍にはなッた人でない、夫れで將軍傳に入れないと云ふことでムりました、夫なれば新田氏はドーであるか是も將軍の命を拜したのではないか將軍傳に入れたのはドーと云ふに、夫れは兵馬の權を司るに依ッて入れたと夫れならば豐臣氏も矢張り兵馬の權を掌つて居たで

はあいか、是れは定めて新田氏が德川氏の祖先であるから德川氏に對して新田氏は入れ豊臣氏は排斥した者であろうか、夫はれ德川氏に媚びたのであると云ふ論もムりましたが、夫れは丁度例の韓文公が唐の一代の歴史を書けと云ふ命がありましても書かあんだ、何せかと言ひましたれば變痴奇妙あ返答がありました、准西の師の時に兵隊が乱暴して韓文公を打殺すと云ふことがありました、それからして書かあんだのです先生が此外史を作る時分は幕府を大變排撃しますから、是れではドーも歴史を書れません、から、新田を將軍薄に入れて灰にあるる所の災を免れたのでムります、之は外史の組織の論が起りますと先生の疵にあるから一應此事を辨して置きます、右三十二の歳に京都に參られまして暫く京都に坐を占められました、夫れから文化十三年に親の春水先生が大病でムりましたで、此地に飛で歸られましたが間にあひません、死あれまして看病が出來ませあんだ、夫れより文政元年寅の年に至るまで、三年の間喪をきられ、忌中を濟して后に九州に行れましたのでムります、山陽の山陽たる所又は外史の事あゞは只今あらかた申述べました通りでムります、夫から平常人に語られまするに、何は兎に角人と云ふ者は名分と云ふことを辨へ、物の本末を知らぬばあらぬと云ふて、遂に南朝の傳を書れました、山陽は楠にせよ名和にせよ忠臣孝子としてけしからん南朝の御方がひいきでムりました、之は外史を見ましても克く分ります、然るに猪飼敬處と云ふて山陽に無意あ人がムりましたが、其人が云はれるにはお前は頻りに本と末と物の筋目を善く語りて、南朝は正統北朝は閏統じやと云ふが、今日の天皇陛下は北朝の御血統ではあいか、夫にお前の樣に南朝を正統と言ふては今日の朝廷に對して失敬ではあいかと申されました、處が先生は其言葉に驚ろかれまして、猪飼先生に不似合の御詞である、成程一時は南朝と北朝とに天樣子が居られましたが、其後和睦にありまして南朝か親分にあり北朝が子とありて三種の神器の引渡しも濟みました、南朝と云ふは北朝に對する南朝である、北朝と云ふも南朝に對する言葉てある、故に一旦和睦にあッた以上は南朝北朝の分ちと云ふ者はあい、故に今の天皇陛下は神武天皇から代々續いて御血統の天子てムります、北朝と云ふ者は足利氏が拵へた時丈の朝廷であるから、今の朝廷は矢張り正統である、南朝か消ゆれば北朝も消へると、猪飼は實に思ひも寄らぬことを云ふと申すとよりして、元此猪飼先生は經學家でムりまして餘程先生に心服しをられましたが、其議論を吐かれてから義絶せられたのでムります、此邊より見ましても外史は先生が熱血を注で、俗に云ふ一生懸命に拵へられたのてムります、南朝北朝の騒動を論するのでも茶談てやつたのでは、ムりません、眞に命かけてやつたのてムります、夫れ故に彼程まで慕ふて居られた猪飼先生とても只の一言葉よりして直ちに義絶する樣あ勢ひにあつたのてムります、實に先生の忠孝心が屆いたと申さねばありません、之れか即ち先生か朝廷へ盡さるゝ處の忠義てムります、

又た我が淺野家に對する忠義は他家へ仕へぬと云ふことで、只今の樣あ郡縣政治の時代で世界一國天下一家と云ふ樣あら子細ありませんが、其時は封建制度でムりまして、一國々々に大名がムりましたから、此國に仕へられねば、他の國に住きて仕へると云ふことが出來ましたのでムります、處が先生は國君に對して多病で官途に堪へられぬと云ふとを以て國を去てをる、夫れ故に他處に行て仕へる杯と云ふとは致しませんと云ふて辭を述て居られるから、何處から申されても決して官途には就かあかつたのてムります、官途に就かざるのみあらす、其以來淺野家に仕へざる限りは袴も着けぬと云ふて居られましたが、只淺野家の舊主人が東京へ上られまする時に伏見に宿まられたと云ふとを聞かれました時には袴を着して南に向ひ拜まれたと云ふとがムります、夫れから之れはチット自慢らしきことではムりますが、之れを以て先生の履歴の御話の仕舞とする積りでムます、自身の肖像の賛が二首ムりますが、一首の分を申します、それは此膝は何處の國の大名がゞの樣に招待しても、其大名の爲めに屈めると云ふとは致さあい何の爲めに屈まあい、我膝は安藝の殿樣に御恩返りに屈する膝である、諸侯に屈するときは聊に國君に對し德義に戻ると云はれ、又此眼は他の物は見ぬ、諸々の書物を拵へる爲めに酒すのである、我が親が何でも世の人の爲めにあるとをして名を擧よと云ふたから、其親の言ひ付けをば空しくせんのである、又己の足は二度親の伴をして芳野に遊び三度海を渡り、四度淀川を上下りをしたけれゞも、大阪を通る度毎にあの金持陶朱猗頓の渦や鹿嶋屋の敷居を跨げたとはあい、又た已の口は人の御流は飲あい、又御下りの肉は喰はぬ、我が手は人民の難儀を救ひ揚げて、相成るへくば我身の及ぶ限りは助けてやりたいと申されました、之はッし自慢らしき談ではムりますが、先生はソーユー風の人でムりました、然る處外史を書かれましたから之れ計りではいけぬ、

政記を拵へて置ぬと外史は武家の手本にした者で、本紀と云者があいから、政記を拵へて朝廷のことを信せさせあければあらんと云ふ處よりして、后に此とを思ひ付かれまして、ヅウと其事に死際まで就て居られましたが、遂に天保三年當年を距る六十一年前今年と丁度干支が合ひまする壬の辰の歳六月でムりました、ヒョット肋膜病とあり胸痛を發せられました、夫れが段々重くありまして遂に喀血症とありました、行狀には只醫者とありますが、其醫者は京都の名高い小石元瑞と云ふ人で、其人に見せられましたが、其醫者が申しまするに之は肺皿症である、今の肺病でムります、之れはあなたが多年心勞あされましたから、此の樣あとにあつたである、之れは實に困た者である、此肺血症に罹ては仕方があいと云はれました、夫れで先生は大變心配せられました然らば全快は出來ぬでアローかと問はれました、處が外々のものあれば全快すると云ふが、お前は懇意であるから云ふが、全快は覺束あいと申されました夫れを聞て先生はア、實に困々ものである、併し夫れも命であれば仕方はあいが、國に母親が未だ殘て居られる、母親に對して云ひ譯けがあい、實に殘念あとである、既に政記も拵へかけて居るが夫れでは何日位命がアローかと問はれました、處が流石の小石元瑞でムりますから申しまするに、通富の人あら斯樣あとは申さあいが先生は天下の豪傑である故に虛は申さんのであるが、モー持てませんぞすることがあれば早くするが宜しい、先生は死を恐れる樣あ人物であいから、斯樣に有体のことを言ふて聞かすと申されました、夫れが丁度八月十五日でありました、處が先生は然らば何日間の壽命であるかと問はれましたるに、今日より三十日前後の壽命であると答へられました、夫れではいそいで遣らねばあらぬと云ふて書き掛けの政記に取掛られましたが、書きかけの續きを十三四章書かれましたら、九月十五日にあつて、三十日が參りましたが、未た生て居られますそこで醫者元瑞を喚で申されるに、お前は困た診斷をして呉れたではあいか、三十日は今日であるが死あぬがドージャと云はれました、處が元瑞は妙じや早や三十日經たかと云ふて居られましたが、其時申されるに三十日が今日で死あぬと云はれるがモー四五日ジャ、迚も七日間はもつまい、ャルとがあれば早くやつて置くがよいと云はれました、夫から母親には病氣は追々全快に赴くと虛を云ふて遣て置けと云ふて、目鏡を掛けて政記の直しに取り掛られました、嗚呼草臥た樣だから少し酒にして呉レーと云ふて、目鏡を掛けたありで眠るが如く死あれたのでムります、夫から後門人どもが寄り集りまして政記を段々直しましたが、論文は殘らず先生が直されましたが、直し殘りのものを弟子が直しましたからして疵が大分殘て居り記事の落て居る處がムります、六冊までは完全に出來てをりますが七八の二卷は先生が記事はヨー書かれあかつたのでムります、故に弟子にアーせいコーせいと指圖を云ひ置かれましたのでムります、福山に石川文平と云ふ人があつて先生の弟子でムります之たから、此人等が書たと云ふ中の人でムります、ドーも只今までの御話は前後錯雜致しましたけれども、之を要するに私の考へでは山陽と云ふ人は兎角流行らぬ事をした人ジャと考へます、世の中には時好に投ずると云ふて流行ることを跡から學で行く夫れで流行と云ふことを好みまするが流行ることを一度見て夫れからやると跡にあるから直に流行らぬ樣にある、夫れで先見を立てゝ世の中は凡そコーあると云ふ見込を立てゝ千人萬人總て人の成さゞる時にあすと云ふ樣にせねばありません、ソーあると總て流行せざることをするのでムります、併し流行らぬとを先きにすると云ふても無暗にすると云ふのではムりません、凡目的と云ふ者を立てゝやらねばありません、既に儒學を唱へられた孔孟あんぞも流行らぬとをした人でムりまする、春秋戰國の時道德時代には仲々仁義道德を知てをつた者はあいゆゑ其の中にて仁義德道を唱へても流行ませあんだが、後にはトーく流行りました、山陽の外史もソーでムりました、始めは之れが禍を蒙ると云ふて杏坪先生も大變に心配をせられましたが、今日は其外史が大變に流行るのでムります、此の如く先生は流行らぬとを先きにした人でムります、先生を今一言申しまするとを流行らぬとを先きに見込んでした人じゃと私は考へます、其他種々の詩文章書畫等の上に於て御話は實に夥しいとでムりまするが、之れは先生の遺事を御話するに付ては夫れ迄は說き及ばしませんが、兎に角南北朝の正閏を論し內部では故君の恩に背かず親御の囑望を空くせぬと云ふ是丈けが先生の大事件でムります、それをつく考へて見ますに何に依て其南北の正閏を論することが出來たのか、何に依て故君の恩に背かぬと云ふことが出來たのか、何に依て親御の囑望を空しくせぬと云ふとか出來たのかと申すに、夫れは前よりの腹を固めると云ふ道德心と云ふ者があつたからでムります併しあから他人が直ぐ此眞似をすると云ふとはいけません、餘程前に腹を固めると云ふ處の注意が入る

ので厶ります、先生は此膓を何にて固めたかと申すと、前に申した通り勉強刻苦に依ておつたので厶ります、才を以て事を成し膽力を以て事をあすと云ふのは少し量見違で厶ります、才や膽力では事を成し遂げると云ふとは出來ません才や膽力を生む處の根本から養成しあければありません、先生が我を呼で才子とする者は我を知らぬ者である、我を勉強刻苦家と云ふものは我を知るものジャと云はれましたので厶りまするが、此社殿内に居らるゝ御方は長とあく少とあく皆先生を敬慕せらるゝ御方と思ひますが、果して敬慕せらるゝあれば外部に顯れたとを慕はずに、内部に心を固めると云ふ事をせあければありません、即ち先生には内部に固まつたものがあつたのであると云ふとに注目し、總て事をあすに流行た後にせずして流行らぬ前より物に先見と云ふとを御付けあさるとが、山陽先生を敬慕あさるゝ御方の第一眼目とあすべきとでアローと存じます、今日は大變に長話しを致しまして諸君も御辛氣で厶りましたでショー、ドーも前後錯雜致しまして御聞取り難くあつたで厶りましよう

（完）

頼家の半面（一）

（春水山陽三樹の家庭）

源井親之翁飛虹又經三十七歳生を終す、十八歳志を立て、京に上り賴三樹三郎、藤堂侯綱大の門に學び、後江戸に下り市川一角、野田笛浦等の塾に遊ぶ、先師三樹砌後其の遺志を紹ぎ四方師王の士に結び、阪下御門の變には大橋順藏等と共に其の盟に入り、武田耕雲齋の謀士と為つては筑波山頭に義旗を聯へして幕軍三萬を壓す、翁今居る江東舊塾に下し悠々として讀書相親しむ、嘗て歴刻詩存の稿あり、其の三樹先師絶命の詩を讀む詩に曰く、人心昭破罪非罪、一死長鯨青史名、今日黄泉瞑目、大君日本西狂生と翁の如きは夫れ志士の好標本ならんか

郷里（信州）を出まして賴家へ入塾を致した時は丁度私が十八歳の年で即ち嘉永二年でした其頃はマダ山陽先生の後室が存生いたされて居りましたから、毎夜お針などをなさいます、所へ參つていろ〳〵のお話を伺ましたが就中春水先生の幼少の時分の行狀の中には後世の人が志を立てる、一端にもならうかと思ふことがあるのです

一体山陽先生の親御の春水先生と云ふ人は備後竹原と云ふ所の產れでありて、竹原といふ所は藝州の矢張領分ではございますが飛地になつて居たのです、其所の染物屋でございますナアー

其の染物屋が春水先生の實家です

親御は染物を致して居られたが子供も數多ありまして男の子の兄弟が三人でした、總領は春水先生其次が杏坪先生其次が春風先生で三人とも餘程有名の大家になられたのであります

春水先生の十一歳の頃或る日親御の名代で名主役場へ兒子錢を納めに行ッた、兒子錢と云ふのは今のお若イ方は御存じなからうが舊幕の時分にはナンですー、田畑の租税を年貢と稱しソレから市街の邸宅の税を兒子錢と申したものであります

先生は其邸宅の租税、子兒錢を納めに行つたのです、ソコで名主役場に參ッて見た所、其役場は座敷のやうな所で名主とソレから組頭と云ふ者が居る、町方には其組頭と云者が四五人で兒子錢の取立てを致して居た先生も小兒のことではあるし其處へ遠慮もなく昇ッて行ッて名主の座ッて居る其の前へ着座して兒子錢を出した

出した所が名主が艶然として怒ッて『不埒の奴だ小前の分際として此處へ來て名主役や組頭の上に座るとは不禮な奴だ』と拳を固めて二三度撲られた、先生はソット泣き出して其儘跣で逃げ歸ッた、逃げ歸ッて親父サンに其話をしたんですナア、さた所が其親御も思慮のある人と見えて

ソレはお前がよくないのだ

我々分際で名主樣とは同席さへも出來ぬのじや、ソレを組頭や名主の上に行ッて座るとは以の外のことである

る名主様の立腹いたされたは決して無理でない、お前が悪かつたのだからこれは勘辨しろと言て懇々諭して其日はソレで濟んだ、所が其後になつて春水先生兎角殘念に思ひ齎々として沈み勝で居る

ソコで親御も少し不審に成つたから或る日一ト間に喚びまして、『此頃の樣子を見るとヒドク其方がフサグやうであるが思ふに過日名主に撲れたのが殘念であつてソレでフサイで居ると察するがこれはドウも已むを得ない事である、さりながらこれを一ツ見返さうと云ふには中〳〵我々風情のこの紺屋職人では到底名主を見返すことは出來ぬがソレには先づ意外な立身でもしなければいかぬ、立身でもすると云ふには今日ではマー學問でもして學者になるとか醫者になるとか云ふやうなことなれば或は其名主の上にも座つて今日の恥辱を雪ぐことが出來るか知れぬがソレより外にはマー無い併し幸ひにして其方は書物が好きだから若し學問をして學者にならうといふ氣があれば遣つて見たらどうだ學費は充分續けやう』と斯う云はれた

親御の話を聞いて春水先生は大いに喜びドウか私も不肖ながら學問を致して見たいと云ふやうなことからしてソコで或る寺院へ頼んで四書の素讀を始めた、所がモトが性來好きでもあるし且つは今の恥辱を雪がうと云ふ一心が凝り固まつてあるから他の小兒とは違つて大變に勉強をする

だから三四年の間に四書、五經、文選など皆素讀が畢えたと云ふ位に進んだ、ソコでモウ郷里のお寺樣では間に合はないやうになつた、ソレで今度は彼地へか出て立派な先生に附いて修業したら宜からうと云ふことになつて來た、所が其頃備前岡山に西山拙齋と云ふこれは備前藩でも重く用ゐられた儒者である、且つ又學問も餘程深かつたさうです、ソレでマー西山先生へ附いて學んだら宜からうと云ふことになつて或る人の紹介を得て岡山に赴き西山先生の塾に這入つた

これは大きな塾で藩の者は皆入塾して居る、寄宿して居る者と通ふて學ぶ者とでは二百名以上もあつた——大分盛んなもの

其處で先生は學んで居つたが矢張り唯今申す通り如何にもいまの恥辱を雪がうと云ふ一念が餘程盛んであるソレに好む所と來て居るから旁〳〵以て進み方が速い丁度足掛け五年程居る内にモウ

塾内には春水先生に及ぶ者が無い位になつた、其頃は今日とは違つて試驗をしてさうして卒業すると云ふことは無い、大抵先生の眼分量でモウ宜からうと云ふやうな所で退塾させて門戸を開かせると云ふ順序になつて居たが春水先生は丁度五年間程も居てさうしてモウ今なら卒業です、その卒業をしてマー一家を開くに足るだけの學問になつたのですソコで先生は大阪へ出なしてさうして門戸を開いたんでしたがタシか其時は二十四五歳であつたと云ふことでした

先生は其處に開業をして教授を以て任して居つた所が同時に大阪には柴野栗山先生、尾藤二州先生が居られた、これは後に幕府に聘せられ古賀彌助先生を入れて幕府の三助と云はれた人です、ソレで大阪に門戸を開いて居つた所が此人達が一舍を結んだ

其舍を混沌舍と名づけ

てさうして自分たちの學問を互に研究したのです、所が混沌舍と云ふものは餘程盛んになつて、混沌舍の舍員と云へば何處へ行つてもマーヒケはとらなかつたさうして居る内にナンでした——何日頃でしたか歳月は分りませぬが藝州藩で儒者を一人抱へたいと云ふことになつて命を大阪に下した、其時分は大阪に諸家の藏屋敷と云ふものがあつた、矢張りあなた方の御藩の仙臺の藏屋敷もありましたが其頃藝州の屋敷の留守居に何某と云ふ人があつて其人の所へ國許から『誰ぞ一人然るべき儒者を見立てゝ抱へよ』と云ふことになつて留守居は其任を帶びて少し搜索して居つた所が其の頃柴野栗山の名が嘖々として高い、ソコで栗山先生の方へ參つて『本藩で一ツお前を抱へたいと云ふ、不足であらうが承諾して貰ひたい』と申し込んだ

所が栗山先生はソレは滅に難有い譯では御座いますが私は此の節阿州徳嶋藩へ出入を致して扶持を戴いて居ります、デ御藩へ仕へると云ふことは餘程面倒でございますがソレに就いて一ツ幸ひのことがあります、私共よりは却つて學問も深い人で頼彌太郎と申す人が御座います、これはモト貴方の御領分の者でもありますからこれをお抱へに成つた方が宜しうございませうと思ひますと返答をした、其譯は栗山先生も豫て春水先生の發奮して讀書師にあつたと云ふ原因は知つて居る其事は懇意に任せて栗山先生に話があつたものと見える、ソレを栗山先生が始終胸中に蓄へてあつて折もあつたら推擧をしやうと思て居た矢先であるから幸ひ推擧する道が付たのです

栗山先生が頻りに頼彌太郎を進めた所が『イヤ其郷のといふ者は領分から出て居るといふことも豫ねて承知して居るが到底お前方の學問とは比較すべきものではないやうに聞いて居るからソレでは本藩の方で不滿だらう』と言ふと『イヤそれは世間の俗物の言ふ所であか〳〵私共の及ぶ所でない

極篤實の人で世間には餘り現はれぬ

けれども其學問の深邃なることに至つては我々も尾藤ろ恐くは及ぶまいと思ひます、決して私の所謂嫉酔口を利くのではない、これは私が責任を帶びて推

衆する譯であるから、貴方が國許へ御復命にあッても決して他日御迷惑にはあらあい確と私が保證して置きます』斯う言はれて留守居もソレでは『一應國許へ其のことを申して遣りませう』と云ふことで國許へ報知をした所が國許の方でもだん〳〵評議に及んで、兎も角篤と大阪の輿論を搜るがよからうと云ふのでソコで今日あら探偵とか何とか云ふのでありませう忍び目付が參りましてだん〳〵と搜ッて見た所が如何にも學力の深邃あるのみあらず言行俱に一の缺點のあい人であると云ふことが分ッた斯う云ふことが分ッたからソレあら召抱へやうと云ふことにありまして丁度其時三百五十〻で

藝州藩の御儒者に召抱へられた

召抱へられてソレでは國許へ參るやうにと云ふことで直樣大阪を引き拂ひ愈々國に歸ることにあッた

所が鄉里の竹原の方でも大評判にあッて今度紺屋息子の彌太郎と云ふ者は名主サンに撲れて大層發奮してソレから學問をはじめ大阪に門戸を開いて居ッたが今度お上からお召抱へにあッたと云ふ評判が嘖〻として起ッたから名主は大いに驚ろいていこれは堪らぬ、アレが來たあらドノやうあことを報せらるふか知れぬウッカリしては居られぬと言ッて密かに名主は逃亡して仕舞ッた

コチラでは先生は先づ日を經て竹原に下ッて行ッた所がマー親族とか故舊とかト尋ねて參ッて両三日を費してソレから今度は

恩人に謝さあければあらぬことがある

と云ッた、所が其恩人と云ふのは誰かと云ふと實は斯くくの次第で私の學問をして今日この結構なる自にあして呉れたのはアノ名主であろ、私は頑を撲れたので今日にあッたのであるからアノ名主サンは私に對しては實に淨難い恩人であち、これへ十分御禮をしやうと思ッて實は輕少なから進物等を整へて參ッた、

ソレは思ひも寄らぬことである實は斯く斯くの次第でお前が來たら何か恨みを報せられるであらうと云つて何地へか逃げて隱れて居る、ナラ氣の毒だ——、アーさう云ふことであッたかと言ッてソレから名主の宅へ其人を以て申込んでだん〳〵搜がしたら近在に潛伏して居たが漸く出て來たと云ふので

春水先生鎗を立て供人を具し

所謂本藩お儒者の品格で以て參ッた、さうして以前のことを述べて謝したと云ふこれは春水先生の話です春水先生はソレから藝州に歸ッて本藩の學校の教官になられたのですがこの前に少し申し落したことがあります——春水先生は大阪に出て居る内に家内を娶ッたその娶ッたのがナンです——、高崎藩の人で篠田儀平と云ふこの人に娘が二人あッて二人ともマー大層貴女であると云ふ話でしたがこれも矢張り大阪の方へ留守居で居た所から其姉の方を尾藤二州先生が貰ひ、其

妹を賴春水先生が娶ッた

シテ藝州へ參る時既に姙身してアチラに下るや否産れたのが即ち山陽先生であるのです

さうして山陽先生は十七歲の時に妻を娶ッた、これは藩の門閥家の御園生何某の娘でした、さうする内に追々學校の教授方が行屆くと云ふことで十四五年の間にだん〳〵加增があッて山陽先生が嫁を貰ッた時分には七百石の身代となり、途に藝州藩の教授職では上席を占むるまでに進んだといふことでした

これから少々向きをかへて山陽先生が國を立退かれた譯を一ッお話し申しませうが、世間では山陽先生は放蕩無賴で春水先生の勘當でも受けたやうに皆云ふて居ります、さうして其後國を出てからは大阪へ出て妻て料理屋の伴頭になッて居たとか、江戸表へ參ッて

木挽町の芝居の幕引きになッて居た

とかいふやうなことを言觸らして居るがソレはマルデ空らごとで放蕩無賴の人では決して無いのです國を出た譯と云ふものはナンです——、唯今も申した通り細君を御園生氏から貰ッた所が其頃と云ふものは先づ今の若イお方などは御存じは無いことだが其藩中で家格が違ふとか或は役が違ふと云ふやうなことになると、そのドウもナンですチ——高下の間が懸隔して居ッて齟齬と云ふやうなことがあッたり、又は我儘なことがあッたり、餘程今日から見ると不思議千萬なことがあッたんです

所で御園生氏は門閥家のことなり賴の家は御領分の人から所謂成上ッた新しい家と云ふので、ソコでさう云ふ門閥家から貰ッたから其細君の勢力が强くッて如何にも不願であッた、山陽先生も實はドウも餘程容れ兼ねて苦惱はドウも甚だ和さなかッた樣子だッた、併しソレは先生も辛抱するやうな丁簡で居られたが何分其父母へ對しても不願の樣子——、ソタシは門閥家の娘そと云ふ顏をして居るので父母の方から機嫌を取らなければならぬと云ふ場合なのです

それぢやアソンな不願の細君は要らぬと云ッた所でマダ其頃は前申上げた通り門閥家の勢ひと云ふものは無上の權力がある、ソレで萬一離緣などいふことがあれば隨分親の進退上にも關すると云ふ振合があッたのだから如何どもすることが出來なくッて山陽先生も內實は餘程困ッた樣子であッた、ソコで始終病氣を言ひ立て、世間へは餘さり顏も出さぬと云ふ塩梅にやッて居たさうですがナンボ夫婦の間が謹るいと言ッてもソコ

が夫婦の間ですから何日か子供が出來た、ソレが男子であッたので名を餘市と附けた

子供が出來たに就いて病身を言ひ立てに山陽先生暇を貰らふとしたもウとても

細君を離別するか自分から退く

かしなければならぬが前お話しした如き次第では離別などはトテモ出來る仕義にあらざれば自ら退身しやうと云ふことになッた併し其頃先生は嫡子ですから何も落度のないに退身させると云ふは無論濟の方でして呉れない筈、屢〻願ひを出しました、願ひは出したがなか〳〵許可されぬといふので遂に意を決して逃亡したのです

江戸表に出て來て今の自分の伯母の夫尾藤二州先生の所へ參ッた、尾藤二州先生は其頃栗山先生と共に聘せられて幕府の御儒者になつて居たですから先づ先生の塾に學んで居ッたのです、スルと春水先生の方からは屢〻歸へるやうにと云ふことを促される、けれども歸れば今の不願不真の妻と俱に居ないではならぬドウしても歸へることが出來ない——ソレがマーシマイにはナンです——ワザ〳〵人を江戸へ寄越して是非伴れ歸れと云ふやうな催促が來た、尾藤先生の方でも斯くまでに親御が言ふものだから兎に角歸ッたらよからうといふので伯母さんと共々に勸められ今は絶体絶命になッて愈〻歸らなければならぬと云ふ、ソコで山陽先生も『さう云ふ譯なら仕方がないから歸りませう、歸りませうが併し歸ればモウ再たび關東の方へ參られぬから勝手ケ間敷いが江戸近くの名所舊跡ばかりも見て歸りたい』と斯う申した『それぢやア關東だけ見て歸へるもよからう』と云ふ譯で

尾藤の用人が附いて見物に出掛けた

のだが先づ上總の方であッた、上總は何所でしたか能くは覺えませぬが木更津か東金の樣でした其所へ泊ッた晩になッてから先生が大層用人に御馳走をして『如何にもマー今度は御苦勞であッた、私の爲めにこんな田舍廻りをしなければならぬと云ふのは誠にお氣の毒な話だ、今夜は緩りと飲んで呉れ』と頻りに山陽先生酒肴を命じて馳走をする譯ソコで用人も俱に飲んでゞん〳〵酒が廻はるに從ッて色々話しの内に山陽先生が『實は久しく今のナンダ私の伯父は嚴重だからッイ遊廓などに行ッて遊びをしたことがないがモウ此所へ來れば大丈夫だから何と一ツ此邊の飯盛なんかの樣子を見てもよからうじやないか』と言ひ出した、用人も格別謝絶する程のことではないからそれならばと云ふのでイマの遊びに出掛けたソレでだん〳〵杯を重ね座敷が引けて各〻座敷に寢ることになッた、さうすると用人が全く娘を擁して寢たと云ふ所を見て密に歸ッて來た

山陽先生用人を欺きざりにして歸ッた

ソコで手早に自分の行李を殘らず取纏めてさうして手を拍つて旅宿の亭主を喚んだ

山陽先生はさて旅宿の亭主を呼んで云ふには『私は俄かに要事が起つたから今より出立をする、就ては連れの男の留守中に立つたオカシイ樣だが一應は話をして貰いたから差支はない筈宜しく賴む』『それでも一應アチラへお話しませう』『ナニそれには及ばぬ今夜は遊興にいッて居るにソンなことを言ッてやると却ッて興味を削ぐから明朝歸ッて來たら連れの者は昨夜の内に立ッたと言ッて呉れ〳〵ばソレで濟むのだ、就ては會計は皆なアチラからする譯だから其の譯を話して貰ッて呉れ』其時分には今のやうに詐欺取財や無錢遊興などの無い時分ですから、マーそれならよろしいと云ふので山陽先生は晩の内に其所を逃げ出したから用人先生は首尾能く置き去りを喰らつた

山陽先生はソレから江戸表へ歸り尾藤先生には一言の挨拶もなく直ぐに上方へ上ぼッて仕舞ッた、さうして伏見を經て大阪へ出たが大阪へ出た時分には全く旅費が盡きて仕舞ッて雲中には一文の貯へもないやうになッたからモウどうともしやうがない

ソレでナンですチー大阪には暫く逗留する積りであッたと見え、旅費は盡き持ッて來た物は一ト品賣り二ツ品賣りだん〳〵賣り盡して尚ほ逗留して居つたが先生は其困難の間に色々著述をしたので——其時分に從事して居ッたのは御承知の『新策』です、これは今でもありますが經濟書——其時分の經濟書です、全くは貫誼の『治平策』に擬して作つたもので先づアー云ふ体裁のもの、今日から見ましても十代の著述とは思はれぬ、眞に天下國家を治めるに必要なことを論じたものであります

其著述をしながらもドウも全くの無一物と成つて今は賣る物もなくなッたからドチラにか行かなきやならぬが旅費が無い、所で或る日

篠崎小竹の家を尋ねて行ッた

篠崎小竹とは近附きではない、近附きではないが小竹の親は篠崎三島と云ふ人で春水先生とは矢張り混沌舎の仲間、同舎員であるからソコで親と親とは極めて親密の交際があッたのです

或る日山陽先生は木綿のボロ袴を穿きヒドイ体裁で篠崎の玄關に參ッた、この篠崎と云ふ人は金滿家で諸侯の用達をして居たが其頃の說に篠崎の身代と云ふものは二十萬兩もあると云ふマー大變なものであつたさうです、其所へ先生尋ねて行ッて

『小竹は居ますか』

と云つた、取次の奴は驚いた、こリア氣違ひか知らん先生のことを『小竹は居ないか』なぞと乞食体の奴が何を言やアがると思ッたから、唯だ『居ない』と誠にッケない挨拶をしたら『さうか』と言ッて去ッて仕舞ッた

然る所間もなく小竹先生が歸られたから留守中の事を色々門人等が申した、其内に今日は斯樣斯樣の怪しげなる体裁の奴が參ッて小竹は居ないかと餘り無禮な奴ですから撲き出さうと思ひましたがソンなことも出來ないからマー大眼に見て許して歸へしました、先生は小首を傾けソレはドンナ風の男であッたか、左樣でございます斯う云ふ体裁でボロ袴に何だか肩の拔けて居るやうな着物を着て居ました、氣狂ひではあるまいかと思ひますと云へば先生ハタと膝を打つてイヤソレに思ひ當ることがある

山陽先生が尾藤の壘を逃げて大阪に行ッたといふことは江戸表から小竹先生の方に文通があッたものと見えて小竹先生のいふには頼德太郎と云ふものが斯う斯う云ふ次第で尾藤の用人を置去りにして逃げて仕舞ッたと云ふ話があるが其の後何處へ行ッたか分らなかッたが或は此地へ來たんではなかろうか、ソレは定めし頼であらう、頼ならば早速に逢ッて何か用があるならば聽いて遣りたいものだが、何處に居るとか云ふことを聽いたか、ドウ致しまして宿を聽く所ではございませぬ不埒な奴だから追返しましたといふので、ソレから出入の者に言ひ付けて尋ねさせたがソンな貧乏人の泊まる所はアラでは貴方の探驗なされたる饑寒窟即ち名護町と云ふ所より外にはございませんから其の名護町の安泊りを頼りに搜ッて見た所が流石金瀧家のやる仕事ですから忽ちに搜ぐり當てたソコで宿の亭主に尋ねて見ると何とも名は云ひませぬ――其時分は氏名を宿帳に附けるなんか云ふことがないから何處の人か知れませぬが何だか時々紙を出して色々の……ナンでも文でも作るのか詩でも書くのかして居ります樣です、ソレでは言葉ッキはドウか、左樣です言葉ッキは何でも中國筋の人のやうに見えますといふので今は頼に逢ひあるまいとて小竹先生は供を伴れて自身に出掛けて行つた、あがッて見ると山陽先生は亂髪蓬頭で何か風呂敷のやうなもの、上に著述物を出して書いて居る

ソコで小竹先生は『私は篠崎庄左衛門であるが先日庄左衛門宅へお尋ね下すッたのは貴方ではありませぬか』

『イヤそれは私だッた、それはマア能く尋ねて來て下すッた、實はお前サンに逢ッて實情を話したいと思ッたが……』何しろ此處ぢゃア話も出來ませぬから兎に角私と一緒に來て呉れといふて山陽先生をば或る割烹店へ誘引した、所が山陽先生のいふには實は斯樣斯樣の次第で逃げて來たが貸し

國許へはどうしても行かれぬ

國許へ行けば再び私は逃亡しなければならぬ話があるので――と云ッて今此處に居り附くと云ふ譯にも行かずドウかコンのところ身の振り方をお前サンに相談をして御厄介になりたいのである、ソレは容易いことであるが併し一應は國許へお歸りになッてはドウか旅費等のことは私が支辨しませう、又なんぞ土産物等を調へるならそれらは一切私が支辨しませうからドウですか一度びお歸りなすッたら……定めし親御も御心配であらうと頼りに勧めた、ケレども一向歸るやうな樣子がないソレではナニしやうではないか、此處で今調業した所で直ぐに國許に知れて益ゝ又國許の方から迎ひが來てヤカマシいことになるだらうから何とか一時凌ぎに何處へか潜伏同樣に居ると云ふ所を拵へたら……イヤそれは最もよい、實は私は斯う云ふ著述をしやうと思ひ立ッて居る際だからドウか人の知れない所でさう云ふ所に居ることが出來れば私の願に望む所である

と山陽先生は答へた

是れから篠崎小竹先生が世話をして或る寺の座敷を借りて暫く其處で著述することになッた、さうして日々筆硯に取り掛ッて居た、アノ

『新策』と云ふものを仕上げて仕舞ッたのは實に此の寺に居ッた時です、ソレから『日本外史』の著述も此時分から既に取り掛ッて居たのです、お寺ではさう云ふ鹽梅であッたが何にしても引用の書物や參考の書物なんかゝ始終要ることが起るもおお寺では充分でない、ドウもこれでは しやうがないが何處か書物でも澤山ある所があれば宜いと心密かに想ッて居た

山陽先生は小竹先生の世話で暫らく大阪の或寺に留まることに成ッたから其事をば窃に小竹先生から親郷の春水先生へ通知したです、斯樣な譯で御子息はお引受けするから御心配なさいますなと通知をした、ソコで春水先生の方でもソレまで悴が思込んだ譯なら強いてコチラへ喚び下すことは止めませう、悴も困ることがあらうと云ふのはモウ

山陽先生が逃亡して暫く音信不通で居るから嫁サンも退屈して子供を拵いて實家へ歸ッて仕舞ッた、ソレで離縁と云ふことが出來ない以上は若し息子の山陽先生が歸れば嫁を喚び寄せなければならぬが如何にもさう云ふ不順不貞の嫁サンだから世話になるのも春水先生老夫婦も實は快くはない譯だから成程悴も歸れば嫁も歸さずばなるまい、さうなッて來ると家内に風波を生ずる譯であるからこれは寧ろ悴の志を通うさした方が宜からうと斯う云ふやうに老先生の方でも先づ決心をしたと見える

そばらくすると春水先生の方から茶山先生の方へ手紙を遣つて頼んだのです、斯う云ふ譯で悴が今は大阪に居るけれどもあァ云ふ賑かな所に一人で居ると云ふは宜くない、何かと心配を生じてならぬからお手前の方へ引取ッてさうしてお前の方の塾の世話でもさせて呉

れないかと申込んだ、スルと菅茶山先生もそれはコチラの望む所實は私も遲て老衰するからドウか私に代ッて塾生の教授をして貰ひたいと思ッて居たが今まで其人を得なかッたが

徳太郎なら充分にやッて呉れる

であらう却ッて私が教へるよりも宜い譯だ、それぢやア御子息を是非私の方へ來るやうに頼みたいと云ふことで返事をした

返事を得たから春水先生は篠崎の方へ其趣きを通じ篠崎から山陽先生へ其事を話しになッた所が山陽先生は不服で進まない、ドウもアー云ふ小兒を相手にして居るは實は嫌だ、それよりかドウかアーコチラでモウ少し著述の立つまで居たいと云ふた所小竹先生の方では いやでもあらうがソレは尊大人の意を安んずるものだから兎も角今度は尊大人の心に從ッた方が宜からうぢやないか、勿論國許へ歸へるならば此上もないことだけれども歸へるのは出來ぬとなれば尊大人の意に從ッて菅の塾に行ッた方が實は子たるの道ではあるまいかと說き伏せられてトウ〳〵參りなせうと云ふことになッた

菅茶山の塾は備後の神辺に在ッて黄葉夕陽村舍の塾と唱へて居た、山陽先生は其處へ行ッて塾頭になッて書生を教へ足掛け三年程其處に居ッた、其三年程居る間に今の『日本外史』も稍〻端緒の立つことになッて來たのですが其年が丁度先生は二十九歳でしたソレから又其塾を脫したのです――ドウも何日まで居ッても開業の目的もないが

菅茶山先生の方では都合が宜い

自分の相手にはなるし、詩だの文だのを頼まれても忙しい時は山陽先生に代作せしむるなど大層都合が宜いからして中々出さない度々暇を請ふたけれども許して呉れないソコでしやうがないからトウ〳〵塾を脫して京都へ上つた

さう云ふ譯で廉塾を脫して京都に參りコヽで有名なる鳩居堂の世話に成ッて木屋町と云ふ所へ家を借りて下宿同樣の詫住居を求めたのです、ソレから翌年三十歳の年に美濃國の方へ遊歷に出掛けた、所が美濃國群上郡上有知村に村瀨平五郎と云ふ豪農が居りました、既を藤城と云ッて豪農で傍ら酒造とソレから質營業をして居た、山陽先生は其處へ參ッた所が大きに今の藤城と云ふ人に用ゐられ是非逗留して貰ひたいと云ふので一ト月程逗留をして詩文の添作や其他種々の話をして聽かせたところから遂にこの藤城が門人になッた

ソレが山陽先生の門人の始めで第一番に入門した人である、藤城は其時山陽先生より六ッ程歳が上であッたといふことです

一ト月程の逗留も過ぎてソレから愈〻出發することになりましたが其時藤城は先生の袂をとり先生は是非門戸をお開きなさい、及ばずながら私が一切のお賄ひを持ちませう、何所へ開業になッても宜しいが、私がお賄ひを持ちませうから速かに思召しの所へ開業なさるが宜しい、斯う云ふ親切の詞であッたから「何れお頼みしませうと丁寧に挨拶して分れた

これから大垣へ參ッて大垣に十日ばかり逗留して其近邊を遊歷し、ソレから濃州を經て名古屋に暫く逗留して京都に歸ッて來た、此時先生の歳が三十一歳

三十一歳の時京都へ歸ッて來て今の熊谷鳩居堂の世話で今度は三本木と云ふ所に宅を持ッた、さうして鹽味噌米炭の類ひは皆藤城の方から送ッて呉れた、ソコで漸く一家を開いた譯です

これが先生經歷の一斑ですが世間で云やうな放蕩無頼やなんぞでは決してないのです、唯今もこなたに話をしたのでありますが世間でさう云評を立てたのは先生は性來酒癖があッたのです

酒を餘計過ごされると氣が荒くなッて隨分其頃だから拔刀も仕兼ん樣子があッた、ソレで大層放蕩の人だとか無頼の人だとか云ふ評を受けたものと見える、併し其實は決してさう云ふことは無いのです、又國を出るにも全く自分の妻と父母との間が實に處し難い事情があッて脫した譯で、其脫したのも不孝にも不義にも當らぬことゝ私共は思ふのです

尤も若いものですから少しの遊びは遣つたでせうが放蕩無頼のものならばなか〳〵アレだけの仕事は出來ない、何にしても

十八歳から著述の志を起し

てさうしてアノマー數百卷の著述をしたんだ、ソレで著述をしたは何日までかと云ふとモウ四十五歳頃までにはハヤ著述ものも出來て仕舞つた、又其間にはアノ通り詩を作り文章を書きなどしたのだ中々通常の者では二三世の仕事があるのです

以上お話し致したことは山陽先生の後室と先師三樹三郎から承はつたのです、私が頼の塾に參ッた歳が嘉永二年で其時山陽先生の後室はまだ存生中で歳はタシカ五十三歳でした、山陽先生とは歳が大層違ッて居たんです――山陽先生は三十の歳に開業したが、其時十七八歳で細君に參られたのです、これが即ち後室で其人の話であります

山陽先生の後室から承はッたことでモウ一ッお話しませう、山陽先生が京都に門戸を開かれて以來先生の聲名が四方に響きまして追々諸方から先生の才學を慕ふ

て入門するものが出來て來た、其頃幕府の家來所謂旗本で百石取り位の川上何某と云ふ人があッて其次男の川上義左衛門東山と號した人が山陽先生の所へ入門いたされて居た、所が矢張其頃浦上春琴と云ふ畫工がありました、これは當時大分賣れたものですが其春琴と山陽先生とは懇意の間柄であッたから時々先生の所へ話に來た

或日のこと春琴が來訪して先生の書齋所謂山紫水明處といふ樓上で先生と對酌して居ッたが其處から頻りに手を鳴らした、一體下女が其用を聞くのが當り前の所折節誰も居なかッたから塾の者がソレへ參ッたんです用を聞きに行ッた所が客の春琴が其處に在ッた德利を持ッて『ヤア燗が冷たくなッたから直して呉れ』と申した、ソレへ參ッたのは例の義左衛門で、義左衛門は春琴の詞に頓着なく『何ンの御用か』と聞返へすと春琴が德利を取ッて

『燗を直して來い』

と命じた、スルと川上は艴然としてソレへ出て春琴の手より德利を取るや否や春琴目懸けてブウタたからたまらない德利は春琴の頭かドコかに當り血は出る中の酒は四方に飛び散る、春琴も不意のことであるから『何をする』と言ッたが側に居た主人の山陽先生聲を上げて『怪しからぬ……亂暴するな』と川上を制した、スルと川上は形を正して春琴に向ひ『怪しからぬ無禮な奴だ、其方は畫工ではないか我々唯今は成程書生である……一介の書生ではあるが苟くも聖人の道を學ぶものである、然るに其方は畫工の分際として燗を直して來いとは何事だ、ソレも先生の仰せならば致方はないが何でもするけれども其方共のやうな畫工分際が我々書生を指揮するのは甚だ不敬であるからブンナグッたがドウした』春琴一言もない蹶然として唯だ涙を押へて居た、流石山陽先生も春琴とは朋友の間でありますから義理にも默ッては居られない場合『ソレは怪しからぬ其方はなんでそんな亂暴をする、若し其方の申す如き次第ならばナゼ其理由を述べぬ……

長者に對して不法千萬の奴だ

……下がれ』と叱ッた、川上今度は山陽先生に向ッて『先生の御詞ではあるがこれは甚だ怪しからぬ今も申す通り我々は苟も聖賢の道を學ぶ者であるから斯樣な畫工からは命令は受ぬ積りである、甚だ不禮の奴だから懲しめの爲にやッたのだ、實際ならば賞すべきではないか、ソレに却て怪からぬの下がれのとソンな師匠ならばコッチから破門する』と言ッて袖を拂ッて其坐を立ち直ぐに塾部屋に歸ッて自分の品物を纏めて去ッて仕舞ッた

ソレから川上は猪飼敬所と云ふ人の所へ入門をした是は經學者で京師では經學者の巨擘と云はれた人マー

詩文では山陽先生、經學は猪飼先生でと云ふ位に賞揚された者である、川上は其處で十分經學を研究した、頼の門戸を傾けやうと云ふ意氣込で日夜精勵して學んだから猪飼敬所の門人では先づ錚々たるものになッた

ソコで程なく卒業をしたものですから下賀茂へ開業を致しました、下賀茂は御承知の通り京都の町から一里もありませうか、下賀茂へ塾を開いてざうして門人を取つて居た、ソレで山陽先生とは始終何に限らず餘程ヒドク頼を排するやうなことがあッた

山陽先生は四十五六歳から喀血症に罹り、所謂當時の肺病ですナ、肺病で喀血をする——治療を加へたがドウも癒らない遂に五十三歳で歿しました

『何用があッて來たか』

と云ふ『サテ今日あがりましたのは別儀ではない、夫德太郎が唯今歿しましてござるそれに就て其間際に至ッて悴三樹三郎は到底誰れに頼んでも中々のワンパク者で迚も教育の何のと云ふことは出來まいと思ふが唯だこれを引き受けてお貰ひしたら人間にならうと云ふのは川上儀左衛門よりホカにない、先生とはお互ひに御疎遠であッたけれども一旦は師となり弟となッた好誼を以てこれまでのことをば死んだ後であるから水に流してドウかお頼み致すから御承諾幾重にもお願ひ申せ』と斯樣に言つて歿しました』と涙と俱に述べた、スルと儀左衛門暫くして、シテ見ればこの儀左衛門を知ッて居て呉れたと見える、果して知ッて居ッたならば眞の知己だ、さう云ふ知己から頼まれて見れば否は云ふべきでないといはれて早速承知してくれた川上は語をついで『跡はドウなすッた』『其儘に捨て措いて參りました』

それならば早速私も參ッてお世話を致さんと直に妻君と同道して來て萬事主として世話を爲し葬式が濟んでから直に三樹三郎を伴れ歸り三樹三郎が十六の歳まで川上儀左衛門が教授をして呉れたと云ふことでした

これは何でした、私が山陽先生の後室から聽いたのでありますが私が頼家へ參ッて居る時分先師三樹三郎が毎月賀茂へ墓參に行くので其時には私が何時でも花を持ッて供をして行くのです、毎月行きましたが東山の長樂寺——これは山陽先生の納ッて居る所、山陽先生は先考のことですからこれは當り前だが川上儀左衛門の墓へも月々行くから後室に就いて其の仔細を尋ねた『川上儀左衛門と云ふ人がありますが、アレは何ぞ御近親でもございますか』と言ッたらアレは斯う斯う云ふ次第であると右のお話を聽いたのであります

（附『山陽先生の後室』云ふのはドウ云ふ身柄の人ですか）

この事に就ても一トくさりのお話がありますが序です

からお話し致さそう

先生は其の歿する時分まで著述をして居られたのです其時分の著述は『通議』で――これは前の『新策』を書き直したものであるが『通議』の内廷の稿で筆を投じて驚れたのでありますが、ですから今も頼家には其草稿がございますが其の草稿には所々に血痕が附いて居ります是は頼家の寶物にしてある、ソコで彌〻危篤の場合になつたとき先生は妻君を喚んでモウ私も遠からず死ぬるだらうと思ふ――今日にも知れぬ、ソレに附いて一つ心掛りのことがあると云はれた、尤も山陽先生も其時分は大層貯蓄して富千金を重ねて居たんです

先生のいはるゝに先づ家計のことなんかは一點の心掛りもないが幹だ幹も復次郎は十二歳でこれは後藤春藏に託してあるからこれはかれが取立ッて呉れるだらうが三樹三郎だテアレは八歳だが

アンなアバレッ兒は誰も預ッて呉れまい

ヨシャ預ッても牧善助、家長彌太郎、宮原謙蕉等に託した所で彼れ等の手際には乘らぬ、さうかと云ッて大阪の篠崎には氣の毒で頼めぬ、唯これのみは已れが死んでから困るだらう、ドウ處置したら善からうかと考へたがアレを人にして呉れるのは下賀茂の川上藏左衛門（後藤春藏左衛門東山と號して先生の門に在りたるが春琴の事より激怒して其門を去りより以來大小さなく春門に反對したること前回に詳しし）より他にはない、他にはないがそれとてもたゞ頼んだのでは聽諾して呉れまいと思ふ、併しそこは頼み方だ、己れが死んだらば己れの死骸は門人に託して直ぐに其方は三樹三郎を伴れて川上の所へ行き

今日德太郎も死去ましてござる

就てはこの悴をドウゾお引立を願ふ、己れの死骸などは構はずにこれを伴れて德太郎の死際に川上先生へ是非引受けて貰ふやうにお頼みをしろと斯う申して歿しましたと云ふて泣き附いて頼んだら或は承知して呉れるかも知れぬと斯う云ふことを弱に妻君に話したソコで其翌日途に歿した、歿すると妻君は其遺言の通り牧だとか家長だとか宮原だとか云ふ諸門人にアトを頼んで置いて自分は三樹三郎の手を引いて一里程ある下賀茂の川上の玄關に音づれて案内を頼むと取次が出て來たから頼の家内が來たと申し入れた、所が川上は『頼の家内に用はないからお目に當らぬ』『ドウぞお許しくだされ今日は少々仔細あッて……』『仔細があらうがあるまいが己れに用のある道理もなし、あッた所が己れの方で遇ふことが出來ぬ、斷はれ』ついに拒絶された、拒絶されたが妻君が『イヤ唯だ一言申上げたいからお遇ひ下さい』それなら通せと申すことで通ッて見ると先生儼然として控へて居る、ソコへ出て來ると何んだと云ふ其聲色共に劇しと云ふ鹽梅

お話は再び前に戻りますが山陽先生が三十一の歳開業してソレから一二年たつたが一人で居るもナンダから妻君を迎へたらよからうと云ふことになつた、其の頃梁川星巖と云ふ詩人が山陽先生と懇意にして居たから『時にお前妻を迎へるなら好い女がある、お前に適した好配偶だらうと思ふが貰ふ氣はないか』と話した、星巖の話の女といふは美濃の大垣に江馬春齡と云ふ醫科の醫者で大層有名な者である其娘のお鳥と云ッたもので年齡は丁度十八九だ、隨分美人で且つ學問がある、ソレから墨竹――竹を能く書いた、號をば細香と云ッて詩も出來文も書くと云ふ人だ、ソレで江馬の

細香女史と云ッては近郷に響いた者だ

が星巖はソレを貰ッてはドウだらうといはれた、山陽先生も美濃へ遊歷したことがあるから遇はなかッたが豫ねて其才名は聞て居たから呉れるなら貰はふと云ふ譯になつたのです、所が星巖も矢張り美濃ですから國へ歸ッた其序に江馬に面會して其事をはなした所が江馬は今迄私がお話しする通り如何にも感んなことですから是迄で縁方から婚姻を申込んで來るのが何ンロもあらうと云ふ譯、其内に最も親なぞが遣らうと思ッたのは尾州の家老に大道寺玄蕃頭と云ふ人――この大道寺からも嫁に欲しいと申込んで來た、ソレから其事を娘に話した所が嫌だと云ふ、私は嫁に行くのは嫌ですと何處から申込んで來ても擯斥して應じない、親も大層愛して居ッたからマ！アレの言ふ儘にしてアレは色色樂みもあるから

嫁に行くのが嫌ならソレでよい

として又強ぞ氣に入った者があッたらソレを夫に持たしてもよひと斯う云ふ譯になッて居た、ソコへ星巖が『ドウですお嬢さんを京都へ嫁にお遣りなさいませぬか』『イヤそれは折角の事ですがアレは何處から言つて來ても嫌だと云ふ譯だが京都は一体誰です』『頼德太郎』――頼德太郎と云ふのは此頃門戸を開いた者で御存じでもありませうが藝州の頼春水の悴山陽と申す者だ』『アー成程先年國へも來たやうの話があッたですがそりやモウチンですお斷り下さい、娘に話した所が行くまいと思ひます』ことはりつけた、其時細香は名古屋に書畫會があッてソレへ聘せられて行ッて留守だッたのですのみならず江馬の心中では大道寺の如き大家より申込ですらいかぬのに頼なぞの一書生へどうして往くものかと思つたのです

スルと四五日經ッて細香女史は名古屋から歸ッて晩食か何か家内中團欒してやッて居たが

春齡先生細香に向ひ

『鳥やお前の所へ斯う云ふことを申して來たものがある隨分身の程を知らぬにも程がある馬鹿な奴ではないか頼鴨太郎とか云ふ貧乏儒者がお前を貰ひたいと云ッ

て來た、又梁川も梁川だそんな者へ媒妁しやうとは隨分世の中には馬鹿な奴もある者だ』と笑ひながら話をした、細香は『さうでございますか』と云ふ内に見る見る面色が變ッて何も言はないでフイと其坐を立ッて仕舞ッた

其晩はソレで濟んでさて翌日になった所が何つも娘が機嫌を伺ひに出て來るのに今日に限ッて出て來ぬ、ソコで春齡が『今朝は眞はドウしたか』『何かお心持が惡るいと云ッてお部屋にお休みでございます』ソレはいかぬ、家内を呼んで『お前行ッて御覽ドンな塩梅だか』直々に母さんが行ッて『ドウかなすッたか』

『何だか心持が惡るくッて』

『ソレは父樣に診て戴いたら宜からう』『イエ格別では、ございませぬから御覽下さるには及びませぬ』ソレだッてさうはいかないと云ふ譯で父樣が診た所が別に差したることもない、名古屋邊りへ旅行した爲めに疲勞したのだらうから養生するがよい

今日も氣分が惡しい翌日も惡るいと云ッて十日計り引籠ッて居たソコでドウ云ふ譯か知らんアレも何か……

……不圖氣が附いたのは此間頼德太郎の婚姻を申込んだのを斷ッた話をした時に何かアレの顏附が變ッたが何か考へたことでもありはせぬか、これは癒いて見るがよからうと、ソレから乳母に托して聽かして見た

始めは何か聽て言はなかッた

が段々話をした所誠にモウ殘念なことをした、私は實はこれまで諸方から貰ひたいと云ふて來ッても殘らず拒絶したのは女と生れた冥加にはドウア賴氏のやうなアヽ云ふ才子に嫁して妻と呼び夫と呼んだら誠にドウも譽れのことだらうと思ッた、然るに私の留守に父がアー云ふ嚴しい拒絶をしたから定めてアチラも絶望したんだらうと思ふ、實は私も先生には心で許して居ッた所がケ樣なことになッて、これ迄樂んで居たことも一朝水泡に屬し誠に遺憾遺る方がない、ソコで其事を乳母が話した處、それはドウも困ッたことだ、實は何處から云ッて來ても行かぬと云ふてるのみならず殊にあんな一書生の所へは行きは仕舞ひと思ッて拒絶したがさう云ふ次第ならば一つコチからモウ一應話をして見やう、それでは早速

細香を從へて京都見物に出掛はやう

と云ッて京都へ行き梁川の所へ行ッて『先日は斯樣のことを仰ッたがドウか山陽先生の方へ上げたいものだがドウだらう、ソレは惜いことをした實は此頃貰ッて仕舞ッた、モウいかぬと云ふ、ソコで細香も大いに落膽をして仕舞ッた、又春齡も失望して誠に私は娘の心を解さずに居て實に憾然のことをした、それではドウか生涯の思出に門入になりたいと云ふので、梁川星巖が細香を紹介して以來女史は山陽先生の門下生となッたと云ふことですが其の貰はれた妻君と云ふは即ち私が色々の御話を承はつた後室でありますがこの後室に就ても奇談があるのです

前略頼家の半面面白く拜見仕候りの(三)の部に於て其頃鶴前岡山に四山樵翁と云ふこれは鶴前藩でも屢く用ゐられた儒者である云〻御師の條にして十六歳の時浪華に出で岡白駒又は那波魯堂等に學きて學び學術思想頗すの比なく柴野栗山の如き尤も之を推重し塩谷宕陰栗山と親善なりしが或時松平侯中藩栗山なして之を藩府に召抱んとしたるが拙齋謂いて曰ざりしことあり去れば栗山その死後墓に題して鄕里備中之儒士四山云々之墓と認めたことあり一處士に外ならず即ち鄕里備中地方にては唯を下しその盛生を惜きしことあるに相違ない之候義なれども鶴前本藩にて宣用して儒者とせしとと迚に岡山に一次於て嫌ありて話され候義とは承知致候得共少が疑も有之且その母關藩を頼し度次第も有之一筆御賀申上候可然御取計を得度候不註

頼山陽

來書の次第を翁に通じ候處右は唯山陽先生の後室より承りし儘を申上候義にて實は來書の如くならんとのことに付此に誤を正し旁〻醇花先生の高敎を深謝す

（耳與樂物任生）

以下

4丁

白紙

◎柳灣翁の肖像

此に掲ぐるは。椿山の筆に成りし柳灣翁の肖像を摸寫せるものにして。卷町館源氏の收藏に係る。像は翁が生存中に描きたるものにして。翁が自賛の題詩あり。左の一律是あり。

自題小像

楊柳灣頭舊釣帥。誤辞江海走天涯。煙蓑雨笠空抛擲。
鳶鼈烏巾豈稱宜。半世埃塵孤榻夢。百年伎倆一囊詩。
閑身猶寄殘風月。吟臥山園養病衰。

◎館柳灣翁の遺稿

時好遷移似循環。百年惟聞宋明間。誰從唐尾尋賜地。西有竹田東柳灣。

とは山陽翁が論詩絶句の一首あり。柳灣翁が一代の詩人たることは世既に定論あり。復た贅言するを須ひず。余頃者館氏の系譜を卷の館源氏に借る。之を閲するに館氏は脇屋義助の裔にして卷村の鄕士あり。安左衛門、安兵衛の二世を經て翁に至る。其の翁を叙するを見るに曰く。

君諱稱は雄次郎。字は樞卿。柳灣又は石香齋と號す。寶暦十二年三月十一日。新潟の母小山氏に生る。天保十五年四月十三日。江戸目白臺の私邸に卒す。壽八十三。江戸牛籠長源寺に葬る。法諡は溫靜院柳灣雅唱居士。

君は安永中。江戸に來り。幕府代官の手代と爲り。尋いて元締に進む。寛政五年。飛彈に在り。進て普請役の格に班し。新たに稟米を賜ふ。文化九年。仕を致す。翁や學殖淹博。尤も詩に長ず。人と爲り、溫雅恬靜にして言笑寡し。地方を別歷する多年。長官を輔佐し到る處治績あり。吏民の愛敬する所と爲る。致仕の後。諸侯聞き招聘して藩政に參せしめんとす。皆辞して就かず。詩書自ら優游を娛みて年を終ふ。年七十餘。自ら其の墓に題して柳灣詩老館樞卿墓と曰ふ。詩集は。柳灣漁唱四卷。其の三卷は刻して世に行はる。文集は。柳灣餘唱一卷。和歌集は。浮萍草一卷。其他著す所。刪定三體詩三卷壯樊川絶句注。皆家に藏す是れ系譜の錄する所。系譜は實に翁の孫霞外の記する所に係る。翁の男を霞舫と爲し。霞舫の子を霞外と爲す。此の二人の事は別に記す可し。而して卷菱湖翁も亦た館氏の系に屬す。尙ほ外に中里柳平（幕府の先手與力）の一家あり。亦た系を同うす。余が館源氏より借りたるは。柳灣漁唱四集の稿本と柳灣遺稿（詩文）二卷。浮萍草一卷とす。余は逐次之を抄錄して以て同好の士に示さんとす。

◎柳灣漁唱四集稿本

春初吟

梅花的的發高枝。草色青青映短籬。聖世先知春澤徧。東風吹暖入茅茨。

午寂

獨倚閑軒坐午晴。銅鑑一穗篆煙輕。孤鶯飛去春園寂。時聽海紅花墜聲。

秋日偶懷

仰看冥々雲雁高。天涯回望首徒搔。草堂未卜詩吟杜。松逕何時菊種陶。五畝田園拋世業。廿年刀筆憶塵勞。誰憐千里倦遊客。蕭颯秋風寒二毛。

高山官舍題壁　以下飛州作

千里來爲山郡丞。跛驢躑躅度崚嶒。土人休笑行裝冷。看取腕中一片氷。到郡。頗有賄贈余一切却之

晚望

濛濛衆嶺翠烟間。鳥去雲歸暮色閑。米家粉本誰摹得。一幅天然水墨山。

暇日遊雲龍寺、寺僧迎而供茶、且自誇云嘗在東都吉祥寺、受南華左氏等諸書于鵬齋先生焉、抗顏縱談不知余爲先生門人也、因戲示一絕、

新結香茶半日緣。竹房相對話堪憐。吾宗莫怪無南北。十載參來鵬叟禪。

新秋即事

新秋一雨喚涼回。可喜山窓絕暑埃。午夢醒來未欹枕。靜看蜻蜓上堂來。京房易占立秋白露下蜻蜓上堂

人日示家人

園丁鑿雪摘春蔬。厨子灌湯宰凍魚。山中人日奇如此。座上莫令尊酒虛。

夏夜聞笛憶函湖

遙聞橫笛數聲悲。誰向黃昏月裡吹。臨風却憶湖村夕。恰是青菱白藕時。

夜坐

雨過蕉葉涼動。風拂葦簾月淸。閑弄庭階樹影。靜聽鄰舍棋聲。

又

雨後西風散鬱蒸。報秋蟲響轉淸澄。爲憐涼月疎簾影。半夜床前不點燈。

江村聞割葦

攪夢鳴禽聽轉悲。緬懷何事最堪思。長音寺裡茅庵曉。三十年前避火時。余童時、侍先君、避火于新洲長音寺、

遊龍泉寺　在野州乙女村

風塵奔走事忽々。乘暇來旋古寺中。漫與詩成題壁去。不期他日碧紗籠。

偶成

翳蚊盡日靜如禪。一卷維摩覺又眠。檐雀啾嘈喚回夢。半窓竹影夕陽前。

孤枕移來插架前。醒時即讀倦時眠。夢魂追蝶尋花去。直入南華第二篇。

秋夜偶興

隱竹搖聲涼可人。吟床試拂數旬塵。久違翰墨場中伴。其奈簿書堆裏身。驅睡苦茶兼破悶。無私明月不欺貧。恐逢俗事敗詩興。豫囑家僮謝雜賓。

睡起

兩情睡味兩相淸。一睡醒時雨已晴。拭眼涼軒捲簾坐。雁來紅畔夕陽明。

冬夜與敬篤同賦

風高城上雁飛低。夜色霜光淸且凄。靜坐閑談人未寢。半輪寒月小樓西。

懷原子得

廿年客負心期。歸去來兮又幾時。憶昔江樓風雪夜。短檠相對讀陶詩。

贈曾早梅叟

擔頭媚々數枝斜。也識世情競早花。自有詩家論變格。偷春笑爾向人誇。

悼亡

炊臼夢驚泪泫然。閨幃香冷恨綿々。篋中紅葉空留字。床上綠琴長斷絃。椎髻前來如昨日。糟糠相伴多年。芳魂一去招難得。悵望疎梅纖月邊。

初夏雜題

庭園雨後一花無。新綠陰濃蝶舞孤。髣髴南隱幽夢裡。高聲叫過賣紗櫥。都下四月初高聲叫街賣蚊帳其聲清暢者倍雇錢云

薰風輕熱襟衣天。獨步西郊聽杜鵑。花盡旗亭遊客少。胡姬閑睡酒壚前。

一日偷閑十日忙。三春詩債奈難償。眼看節物驚人去。上市溪鱸四寸強。溪鱸一名月記魚々市諺云三月三寸八月八寸

吟坐南窓晝漏遲。賣苗天氣雨如絲。痴兒也慣耽閑事。籬畔親栽錦荔枝。

過服升庵池亭

池亭雨已晴。景物轉澄淸。詩酒耽閑適。香茶入品評。荷迎幽吹舞。窓受夕陽明。留客主人意。水禽向晚鳴。

夢舊妓

琵琶一曲半嬌羞。彷彿潯陽江口舟。三十年前舊痴恨。無端復夢錦纏頭。

晚景

演射場頭人歛箭。讀書窓裏敲詩來。秋來一段蕭條意。疎柳殘蟬日落時。

秋夜獨坐

寂々茅齋靜坐宜。凉秋淸夜漏長時。爐鑪煙炭親煎茗。檠几挑燈閑鈔詩。且喜小鑪湯濃早。寧嫌古硯墨濃遲。此中滋味無人識。但有竹窓斜月窺。

戊午十二月十九日立春

往年年光暗裡移。催春景物入吟詩。牢泓硯凍方纔解。數囀籠鶯先自知。已喜閒餘逢節早。却驚臘後問梅遲。東風廿四番花信。遲速細將新曆推。

雪中雜題

柳外風寒飄雪花。愛看整々又斜々。女鬟頗有慧心在。絮語拈來學謝家。

爐上自溫酒一鐺。誰來戶外拂衣聲。笑聞隣僕乞葱白。知是也調菽乳羹。

吟褐火籠相伴宜。枕頭一劵把書披。袁安堅臥蔡唐讀。雪滿門庭我是誰。

滿庭皓々布瑤華。一夜興深吟士家。濁酒三杯醺醉後。小鑑瀹雪點梅花。

瑤蘂相來白雪湯。三杯暖罷滿腔香。詩家自有梅花飲。不學仙人煮石方。

立春日懷致遠

湘竹籠中鶯一聲。朝來頓覺臘寒輕。遙懷歸去江鄉客。應聽流澌瑟々鳴。致遠曾學施愚山流澌瑟々鳴之句、云非江鄉人不能解此句、

春日偶作

小園一雨喚春回。好是南軒乘暖開。玉骨美人含睇立。金衣公子弄歌來。寧嘆遊興年々減。且喜韶光日々催。非得東皇養和力。吟心何自起寒灰。

又

獨坐晴新暖景新。乘閑又拂案頭塵。家貧何害窮詩客。戶小偏嫌俗酒人。鍊句吟成梅共咲。香醪賒得柳舒顰。新鶯却是可憐子。時弄嬌簧來報春。

江東試春次松崎先生韻

案頭塵牘未成堆。乘暇江東試步來。五株十株臨水柳。三朶兩朶出牆梅。停筇野徑聽黃鳥。假榻林亭蕉綠醅。不用春光問梁淺。吟心自覺數分開。

初夢

十日陰霖放爛晴。葛移初試覺身輕。薰風吹暖促時令。賣箔聲和賣扇聲。

村路即事

荒村驅馬去。景物更蕭然。野徑分還合。林烟斷復連。晴明田外水。秋爽雨餘天。行役竟何事。忽々不駐鞭。

戲濤梅花

山城花信舊來遲。遙憶佳人野水涯。吟窓又恐春猶冷。自炙凍泓畫一枝。

二木生持扇來乞句戲書與之

山窓幾日廢吟哢。但有曲肱與嬾宜。笑君好事眞成錯。佳扇持來乞惡詩。

題松下抱琴圖

笙笛箏琶耳久淫。廣陵誰復問遺音。山中有箇蒼髯叟。獨識先生千古心。

奉送小出郎君趣選

賢郎藝林選。應舉意髮々。射御十城志。文章經國心。程期驟馬駛。路人碧雲深。早晚泥金孚。待君寄捷音。

扇頭小景爲臥中山人題

山寂々水悠々。萬古山長在。千秋水自流。山光水色誰爲主。明月清風一葉舟。

秋夜小集、邀子信郎君、賞月分韻

空山秋淅瀝。柴門日蕭條。霖雨晚來歇。颼然來清飈。嘉賓幸見枉。即便倒屐邀。騷客相追隨。相共咏凉宵。月出古城上。古城麟岩嶢。前溪誰家子。正吹月下簫。幽賞逐夜深。更令我心遙。多謝山頭月。晴光臨小寮。

長嘯亭待月、與諸子同賦

輞川王斐遊。千古傳騷流。長嘯與彈琴。誰占林亭幽。主人詩畫癖。好尚自相猶。迎客坐清樾。愛此靜夜悠。四座共心賞。五字互唱酬。明月來相照。宛然竹里秋。

宿山家、戲贈主翁

胡枝爛熳數叢花。夜々迷離睡短笆。秋來添得山翁課。自掃曉庭望月沙。

朝六橋　橋在益田郡小坂村、飛虹百尺、高架斷岸、安永中橋梁朽廢、以取材深山、多費民費、不復修造、乃架假橋于溪間巨石、石勢磊嵬、橋成三折、

一路青谿數里程。激流跳沫碧回縈。誰人學取銀鈎美。橋架巉巖乙字橫。

雙雞哺雛圖　沈衡齋原圖　旭亭平豹摹

階前草實碧如珠。角々嘐々喚哺雛。勸君莫設食蟲蟻。也使杜陵叱小奴。

鯉魚圖爲武川生題

三十六鱗金潑々。七十二潭水深々。龍門待汝飛騰日。一曬雲天萬里心。

雨夜獨坐懷致遠敬篤致遠在江都　敬篤歸越

相逢相別各天涯。聚蔵寧圖似個奇。懷昨城西風雨夜。一燈三案讀腦詩。

宿野麥村

山村四月麥猶青。雪盡高原蕨欲萌。日暮人飯深樹裏。

幾家松火打花聲。

夏日贈石井淑

二麥村々歌雨岐。秋田見緑害滋。今年米價無人問。
閑向籮縣號旗。東中秋、飛州有蝗災、明年夏米價高騰、淑請于郡府致糴、自信州用牛馬百頭駄送、每駄插糴子小旗、

送柱山若思飯郷

遠遊吟倦戀郷關。天畔秋風吹旅顔。好去山城秋色曉。白雲紅葉送君還。

和田信敬宅觀瓶梅、信敬好瓶花、山郡無早梅

諷益田郡村正、郵致數十枝、

高齋雅玩幾枝梅。白玉瓶中媚々開。怪得山城春信早。郵夫踏雪益田來。

温瓶下帷養珍葩。辛苦偷春好自誇。寒色城頭千樹曉。誰人肯看霧凇花。

除夕作

荏苒歳光惚裏過。明春花鳥又如何。燈前細算一年事。詩債多於酒債多。

東村散歩

吟筇十里步徐々。追輿東村雨霽初。梅店風薰發芳氣。柳塘水暖躍游魚。紛々世事須抛擲。處々春光似起予。莫把閑愁徒度日。煙霞自可向人疎。

閏正月七日、臥牛山人贈宮川芹、附以七言二句、余爲足初二句、

春淺山城暖未回。東風吹雪雪如梅。今年有閏兩人日。又向南村挑菜來。

奉賀小出郎君省試甲科

經國文章自有輝。英聲是日厭場闈。杏花壇上揮毫罷。躋殿中拜、賜歸。

享和癸亥四月二十三日、故飛彈國司黄門姉小路公三百年忌辰、高山赤田元義田中大秀與諸文士集長久密寺、賦詩及和歌、機亦與焉、乃裁短什、聊致蘋蘩之敬、

國司臺館細江濱。雅化當年牧庶群。寧謂荒城悲彼黍。空留遺草感斯文。丹楓曾染山頭雪。玉樹猶薰洞口雲。錦山紅楓洞口江水流光三百歳。長令騷士汲餘芬。

櫻花公曾詠之

同前席上分公和歌題得水邊螢

幾點流螢照水微。野菅草外轉依依。應憐昔日仙遊跡。猶向細江江上飛。

郡齋夜坐

塵事苦倥偬。郡庭少暇日。暮夜簿書餘。薄言娛閑佚。清風當夕至。颯颯入吾室。拂床咏凉宵。端居待月出。

月出夜愈清。張琴横在膝。一彈散孤懷。忘彼得與失。人生貴自適。賞音非所必。澹矣此時心。短言能得述。

題畫

江上晴光接翠微。斷坡人立望依依。中流鼓櫂誰家子。滿艇載將山色歸。

高山竹枝

南陌相逢嬌且羞。緑鬟斜挿玉搔頭。借問夜來何處宿。中橋西畔酒家樓。

中橋橋上望新晴。一帶長川秋水清。素手盈盈臨岸女。嬌歌齊唱滌蕪菁。

將歸東都。寓橋東逆旅。乘暇出遊。

口占一絶。

吟步乘晴曳瘦藤。野橋村店記吾曾。堪憐歳歳行春路。花柳不欺舊郡丞。

甲子三月。全家去飛州赴東都。到岐阜福嶋驛。路引有誤寫。不得過關。留滯數日題短什遣悶。

驛谷蕭條湖谷間。全家歸思幾時閑。自無孤白佳人覓。羅學雞鳴公子還。窓外飽看山疊疊。枕頭厭聽水潺潺。可憐三歳嬌痴女。數問何因不過關。

藪原驛

人家一帶倚峰巒。山驛蕭條別有情。少婦連檐皆賣櫛。招牌一樣六娘名。

山水意匠歌。

剪紙作山巖竹樹樓閣亭谷橋梁舟車等。各施丹青。隨爲布置于白紙盤上。而用木格糊薄綃蓋之。宛如落墨畫。名曰山水意匠。茗溪岸君。集陸放翁句。作七古一篇。余亦效顰。集蘇長公句。

山蒼蒼。江茫茫。經營初有適。信手筆都忘。一寄千里目。舊遊心自省。照我胸中山。默坐消日永。茲遊淡泊歡有餘。剡藤玉版開雪膚。薄羅勻霧蓋新粧。樓臺明滅山有無。不知人間何處有此境。清景一失後難摹。會看飛仙虎頭筐。逢場作戲三昧俱。一檐時對畫圖開。湖上青山翠作堆。望湖樓下水如天。千里孤帆又獨來。我是江南舊遊客。當年不知此清眞。桃花流水在人世。莫向長沮更問津。戲作小詩君勿笑。畫山何必山中人。

移寓

冷泉亭畔卜居來。半畝荒園花可栽。恰喜今朝遇寅日。牛門夜市買寒梅。

菊田叔德書至云。信中無杜鵑。請寄數聲。蓋設難而窘余也。陶隱居詩云。山中何所有。嶺上多白雲。只可自怡悅。不堪持贈君。夫雲有形之物。而猶云不堪持贈。聲固無形。豈得而

遠致乎。雖然八行尺書。千重如面。則寄聲不可謂難矣。因作一絶句答之。以充雪間一聲。驚破山窓幽夢。請勿謂巴人苦調。不及蜀魄清怨。日夜江城杜宇鳴。鳴時我豈獨無情。想君客裏不勝聽。不寄不如歸去聲。

悼水野政明。　政明亡之夕。與客對棊。局終一笑而逝矣。年四十九。

了得人間一局棋。輸贏爭罷向泉歸。蹇蹇著先應待汝。共論四十九年非。

即　目

雨後春園滿地花。午軒睡起葛巾斜。疎簾欲捲還閑立。黄雀將雛浴石崖。

春初偶作

鷄日晴運穀日天。今朝喜見八占全。欲推農候披新曆。自笑官情同舊年。投刺拜趨閑未得。尋梅幽約夢相牽。何當能學斜川叟。開歲先賡五日篇。

游　春　海野蝼齋集西原。與諸子同賦分韻。

郊原雨歇日輝輝。美景良辰期不違。柳幕翠深鶯度曲。花茵紅暖客忘歸。頻沽市上文君酒。好典江頭杜老衣。長愛年年游望足。故園芳草定萋菲。

雨中看花

花發都無一日好。看花莫厭雨凄凄。明朝雨霽花爲雪。畢道不消蹈作泥。

送稻毛聖民遊越後。聖民輯近人詩。名曰采風集。刻初編三卷。

見爾新彫采風編。信山越海自堪傳。集中佳句人如問。一一鶴聲飛上天。

睡起即事

小堂睡起暮凉深。午夢茫茫不可尋。乍記鈞天聽九奏。風絃自響倚窓琴。

京極藤納言佐野渡遇雪圖

騎驢思句秦京道。拂袖停鞭佐野津。一片閑心抛不得。幾生風雪惱吟身。

看感應寺千佛會買鬮者。戲作絶句。

感應寺下喧如市。群聚門前立待晨。不知臺上發鬮日。誰是三千第一人。

雨夜懷致遠

獨臥獨吟愁索莫。半眠半醒夢曹騰。連床人去隔千里。耿耿蓬窓雨夜燈。

新秋夜坐同某生

天公未必向人慳。我賜初涼一夜閑。啞軋柴門風半扇。虛明板屋月三間。竹搖波影如臨水。蛬振金音似在山。儘得清秋新句子。孤吟不用更加删。

◎浮　萍　草

三月三日

桃の花咲にけらしな唐人も
はらひするてふ今日は來に鳧

待　郭　公

ねもやらて今夜も明ぬほとゝきす
松の木間に月は殘りて

山里にて春の暮に鶯を聞て

深山邊は春くれぬともおもはへす
のこれる花に鶯の啼

夕　雨

風はやみ片山過ゝ夕立の
晴る梢に日くらしのこる

首夏雨

花ちりて程ふる雨も猶そうき
いとひし春の心習ひに

子規數聲

こゝをせに今そかたらふ子規
きかて幾夜か杉の村立

扇

手にあらすさゝろき扇に夏も猶
けぬてふ雪の色をこそみれ

入月をまねく扇の風よりや
あきは涼しくあり初むらん

飛彈國の下つかさ仰かうふりて

いさ行むひたのたくみか墨繩の
直なる御代は住もうからし

秋のはしめに鶯のなくを聞て

朝霧の立ち霞に見あされて
はるかとたとる鶯の聲

郡司の君の六十の賀をよみて奉る

末長き君かよはひのさるきかな
ちよともわふく民の心に

青柳風靜

折々は柳か枝に色見ゑて
ふくとしもなき庭の春風

ふく風も心やすらひ糸柳
ぬく白玉の露もこぼれす

晚鐘何方

はのかにもそことしるべの風もなし
たゞ遠方の入相のかね

八月十五夜秀寛の君の御許より月のうたあまたみせ給ふとて某等が歌をも見せ奉るべきよし仰られける御返事に

草の戸に見るもかしこし名に高き
　月にみかける玉の言の葉

露しけき言の葉草の下にすむ
　ひしもてよひは月に鳴あり

とみの事とて聞伝奉るもいとおこにあん

おあし夜わかき人々はき妻求んとてかたみに
　あさりあへる時雲の月を立おほひければ

耻しらぬしこまずらをか妻こひに
　月さへ雲に面かくすらん

菊の花おそきとしの九月九日に

花はまた咲初ねともけふといへは
　こゝろに句ふきくの白露

蟲

秋はまた淺茅か下の夕露に
　そこはかとあくむしのあくある

市村成孝わさひと蕎麥をおくられ侍しかは

紅葉かさね見せて紅ゐのからの紙にかきて

山里の秋はさひしといふ人の
　心ぞはあに勝る紅葉か

小出寛如君あつまへ立出給ふ馬のはなむけしける詞

寛如のきみちゝ君の飛彈の郡司にて下り給ふにそひ奉り給ひていにし年の葉月のころより此國にとゞまり給ひことしあつまの大城のつかさめしにもれ給はしとて出立給ふやつかり此とゝせかはとちち君の下つかさにて君にもへたてなくよろつに馴つかうまつりていまはた御名殘盡せずおもひ奉る物あから年月まなひとり給へりし文のみちものゝふのわさとも人にすくれさせ給へれはこたひのゑらひにあたり給ひてんはつゆたかふへくもわらねはうれしさもまたいはんかたなしことに此國に名たゝる位の山を越行給ふさへそのしるしあるらんかしとゝとり〳〵御かと出をいはひ奉りて

わけのはる道はまよはし位山

早秋越行君かこゝろしるしも

狩衣裾吹かへすあしたより
　身にしみ初る野への秋風

年内早梅

としのうちに先咲梅にあれ衣
　袖にはは せて春をまたはや　（終）

◎霞舫

館霞舫は通稱俊藏。字は昆陽。文化五年三月某日。江戸牛籠輕子坂に生る。嘉永六年正月二十八日。江戸目白臺私邸に卒す。享年四十六。長源寺の先塋に葬る。法諡は成功院霞舫天冲居士。

文政九年八月。幕府の先手與力と爲る。因て目白臺に移住す。弘化三年五月。仕を致す。君幼にして書を清水曲河に學ぶ。曲翁歿して後ち。同門の先輩岡田閑林に從ひ。花卉翎毛を學ぶ。後ち菊池容齋の門に入り。人物を學ぶこと二年。慨然として歎して曰く。一千日を出でずして古人に超越し造化をして筆端に在ら使るに非らざれば。則ち須らく此の一臂を斷すべしと。勵精刻苦。技大に進み。聲名四に聞ふ。人あり其の傳采の美を稱すれば。君哂ふて云く是れ所謂院畫のみ。徒らに人の翫具と爲る。余の志に非らざる也。然れども余此に因て金を得んと欲す。余が爲さんと欲する所を爲すあり。苟くも金を得るに非らざれば。一筆も雖下さず。性卓犖不羈。小節を修めず。故を以て毀譽相半はす。官に在りて志を得ず。年三十九にして仕を致す。祝髮して專ら繪事に力む。潤筆の入る多しと雖。周急卹窮。手に隨つて揮霍し。視て土芥の如くす。人親みて之れを敬す。疾に嬰り遽に歿す。一千日を出でざるの言。遂に讖を成す。悲夫。詩集一卷。和歌集一卷。詩集は安政巳亥の春火に燬くと云。

◎霞外

館霞外は通稱伊藏。字は宜民。霞外と號す。天保四年八月十九日。目白臺に生る。弘化三年五月。父の後を襲ぎて先手與力と爲る。文久二年四月。出てゝ

閒適

南山人

余頃者館源氏(西蒲原郡卷町)より柳灣翁の遺稿を借る。蓋し未だ梓に上せざるもの。中に左の一絶あり。

冬夜寄懷臥牛山人

塞光凜凜、千里、遙望所思天一涯。如今底事尤相憶、憶得東山雪屋時。

臥牛山人とは長尾秋水翁あり。二家唱酬の狀。以て想像するに足らん。

又た柳灣翁が致仕後の吟あり。左の如し。

謾吟

五十餘年塵土身。老拋刀筆返茅榛。臺中儲得詩千首、對客漫誇閑與貧。

昨、偶ま村上の面江生左の秋水翁の二絶を送致す。云ふ是れ家に藏するものと。

寒夜

古今成敗可審詳。燈火一簾書一牀。偶ま擁爐閒落葉、臥牛山下小茅堂。

即事

強爲苦處終無苦。適閑時不復閑。杖履催人出門去、梅花半落水潺潺。

古今成敗可審詳、是れ實に秋水翁の本領。二家の詩を對照すれば。則ち二家の風を冥想するを得んか。

◎越風石臼歌

は陳穀山の解に係る、穀山名は煥章、字は子文、本姓は小田氏、頸城郡(中)竹直村の人、江戸に至り麻布二本榎に寓居し、片山兼山の門に入る、兼山歿して後ち故里に還り、講說を以て業とす、常に詼諧世を弄す、文化元年六月六日歿す、年六十五、著述多し、石臼歌亦た其一、

此の越風石臼歌は、序文の記する所によれば總て十二卷ありと、然れども余は『卷一』の一冊を獲たるのみ、是れ高橋自恃氏(內閣翰長)之を大坂の書肆に獲て以て佐藤良太郎氏に贈りしもの、但だ其の全部を獲ざるを遺憾とす、而も或は餘の十一卷は未だ之を雕刻せずして止みたるものあるやも知る可らず、今ま茲に其の解を載せて以て同好の士に示す、

越風石臼歌卷一

穀山　陳煥章子文解

東都　河保定興夫校

染川之什詁訓第一

和歌三十一言、徒歌二十六言、俳歌十七言、皆人世之所ニ移易一、政刑之所ニ舉錯一、千載之下、坐而觀レ之也、善哉、先王之採以觀ニ土風一、居然而能辨ニ八方一、和歌、王孫公子之所レ賞、而庶人不レ得レ爲レ之、飾ニ其貌一、文ニ其辭一、俳歌、逸民閑人之所レ能、而君子不レ得レ作レ之、薙ニ其髮一、奇ニ其衣一、徒歌、越俗之所レ傳、石臼屑レ粟、偶而挽レ之、說以忘レ勞、粉末食レ之、其詞二十六言、吟ニ咏情性一、遣ニ其思一者也、

思ひ染川わたらぬさきいかはせ
深きと白浪だ

染川、水名、染始同、白浪與レ弗レ知同、謂ニ漸至ニ深也、其始淺、其衷深、其終溺、人情所レ不レ免也、溺レ水猶可レ拯也、溺レ人不レ可レ拯也、古人所レ發ニ歎於斯一也、

染て悔しや藍紫にもとの
白地がましじやもの

染初逢也、和言初染同、藍與レ逢同、紫與ニ村里一同、村落疎也、市井密也、逢藍會同、謂下不レ私ニ市井之人一、而私ニ村落之人一、相逢之不レ數也、悔レ不レ慎ニ其始一也、白地謂レ不レ知也、斯歌、即敦忠之意、彼以三十一言、此以二十六言、體裁不レ同、攄レ懷何異、俳諧十七言、十四言、樂府引曲、古詩歌行、近體五七言律絕、皆此之意

唯安以樂、與怨以怒之別而已、墨子所悲、豈是乎、

つとめする身に實の有らば
花に子の登る山吹に

勸諭二青樓之娼鬻一姪爲業者一也。其女日夜。恣二淫慾一故情不一一。是以妖態萬狀。無二情實一矣。然此言非一無一疑。睹一貌而相說。人之情也。雖曰二憐一金而不一一憐一人。吾不一信也。按此歌詞。處女非一諷二情人一也妓女繩二情人一之辭也。由レ是觀レ之。剋臂以誓。之死矢靡レ慝。反情之薄也。

小野の小町よ露深草の
垣に立名は吹く嵐

小野小野美人也。善二三十一言歌一。名施二天下一。帝寵無一類。然性淫乱。攘以二和歌一。無二情不一一適。深草少將聞而慕レ之。欲二一當一レ之。見而歎レ之。願二肌觸一レ之。日夜欽羨。思切二中心一。寄二懷於歌詞一而贈レ之。小町不レ顧二視一之。少將夜々穿垣窺レ之。小町私見而戲曰。來百則縱レ之。少將喜而信レ之。往九十九夜。至則期欲畢。志將レ遂。其喜不レ可二勝言一。明夜之期。長如二數十年一。憊而眠。車轉墜。厭一殺レ之。小町明日出見之。愍不レ勝レ悲。其哀傷感二動人一。自是小町。怏々然心不レ樂。色衰寵還歇。妬深人亦棄。至レ死不一能忘二于懷一云。」此歌文辭深遠。假二借一人一。反覆議論。言不レ出二二十六一。而深草少將。小野小町之情態。溢二於言外一。以達二已之思一。而施二於後世一也。蓋男子之所レ作。怨二女子之不一レ從也。女驕而侮レ己。歎二情未レ達而人口籍甚一。小町以比レ彼。少將以當レ己。人言以喻レ嵐。刺二處女之驕侮一也。』立二名於垣一。謂二少將往而所レ倚之牆一也。欲レ之二小町之所一。而立二於巖牆之下一。體未レ觸二於肌膚一。而人言匈々。名立二於垣上一。實仆二於車下一。名實之失。可レ憐之至也。是及レ門未レ至レ家。升レ堂不レ入レ室。嗟乎其室則邇。其人甚遠。豈不二爾思一。子不二我即一。死而又死。所以三使二人痛惜一也。

私はけやきで木は堅けれど
人の櫃の木になれ〳〵と

樫木ノ名、木氣同、堅固同。人謂二他人一、櫃木ノ名、與レ餘同、樫櫃相似、故與レ木、木謂二氣質一也、昔有二剛愎者一、與レ人爭レ曰、縱有二櫃子一、何如樫質一

櫃有一子、甘美食レ之、補二脾胃一、樫無レ實、枝葉相類。木皮相肖。大數十圍、然樫者固櫃者弱、剛柔各異、

竹によしある浮世はいやよ
人は檻がき結たがる

竹有レ節、謂不レ通也、浮世、浮與憂同、竹ノ節之間曰レ餘、餘與レ世同、檻垣之檻、與レ增同、結與レ言同、歎二人言之甚一、欲レ會不一レ能也、故會不レ數也、與二其ノ恐一人言一、不レ如レ無二私、凡ノ物有レ形而有レ影、宜レ哉、人ノ之疾、而誹二謗之一、然似レ恐、而實不レ恐、詭々之聲音顏色、距二人於未然一、罵二其人一曰、不レ洗二已一椀一、而滌二人ノ器一、不レ芸二吾田一而蕪二鄰ノ之地一、不レ爲可レ爲、而致レ不レ可レ致、佚樂無レ度、終二廢一萬事一、能距レ諫、以罪二言者一婦人ノ之情也、按此歌詞在二意不一レ恐二人言一、可レ醜之甚也、詩曰、仲可レ懷也、人之多言、亦可レ畏也、是婦人ノ之態也、

思ふこゝろのいつわりあきは
虎と見る箭の石に立つ

用二熊陶子事一、蓋不レ知二身之賤一、慕二貴家之女一也、至誠感レ神、何以不レ遂、又李廣射レ雕之事、皆誠而精、則石猶飲レ羽、況人乎、吾州之野人傳云、人、或有レ務二於耕稼一者、早旦往田、執レ杵以爲レ耒、耕一田三畝餘、手足疲倦、將二休息一、撿レ之即杵也、驚愕怪レ之、再耕レ之、不一能復耕一也、其初爲レ耒、操心專一、力行不レ疑、是以杵爲二耒之用一既知レ非レ耒、則杵亦不レ能爲レ耒也、何則心爲二之主一也、又有二一人一、蚤晏將レ薙レ草、執レ曲木一以爲レ鎌、刈レ草七八束、覺二刃之澁一、將レ勵レ之、用二砥石一磨レ之、膚與レ石不レ親、怪而熟視レ之、見二一木之卷曲一、再刈レ之、又不レ得レ薙草、是皆誠與レ精、通二於天一、誠乎此者、刑乎彼也、其心無レ僞、則何ノ難カ之有、

思ひかけたら無驗にはせまい
石に立つ箭の有とき〻

是必男子之言、有二難レ爲之意一、然箭之徹レ石猶沒レ羽、況於肉乎、

石に立つ箭の有とは聞けど
あせに届かぬ我が思ひ

届至也、歎二吾カ思未一レ遂也、届遂和言同、蓋斯男性急、怒女之決レ志、不二早從一已欲一也、此女持二兩端一、而首二鼠一於貧富之間一、非レ關二美惡一矣、思不レ遂者、無二金銀以射一レ之也、金銀

之射レ人、捉ニ於矢一、

みち踏む鹿憎ひといへど
戀の文かく筆と成る

黄葉ヲ謂フ茂美知一、愛ノ其人一、及フ屋島一、憎ニ其憎一、及フ袈裟一、人情乎、人情也、

染川之什十首々二十六言

富士之什詰訓第二

富士のすみ野に朝貝うへて
露と花との色くらべ

朝貝、謂ニ牽牛花一也、富士山之麓、四方曠野、周遭千里、謂ニ之ヲ裾野一、和歌ノ所レ謂、千載不レ可レ易也、其山高峻、堪四ニ之ヲ、彼ノ三山一六中其ノ五嶽、而三仙山、不レ能レ爭ニ其麗一、五大嶽モ不レ得レ敵ニ其ノ秀、狀若ニ芙蓉之花一、故ニ一名ニ芙蓉山一、又曰フ不二山一、言ニ一而不レ二也、眞ニ天下之名山哉、其神也靈也、五嶽三山、何ソ得レ比焉、此歌之意、歎ニ可レ仰而不レ可レ慕ヲ也、種ニ牽牛花一、何ソ必シモ富山ノ裾野、以ニ至微之花一、對ニ至高之山一、蓋ッ以ニ賤ク且ッ短命一、慕ニ貴ク且ッ長壽ヲ也、然ラバ則不下高ニ尚ニノ其志一願中難レ得之貨上乎、故ニ言ニ花與レ露爭ニ色一、以テ遣ニ己カ之情ヲ而已、花以比ニ芙蓉山一、露以喻ニ區々一身一、或曰牽牛之花日出テ而萎、豈得ニ引レ蔓而施ニ於絶頂一哉、

わはでくもりし心の鏡
遇ふて霽さんうたがひを

不レ遇而ノ噫ヒ、其ノ詩ニ曰、一日不レ見如ニ三月一兮、遇テ而霽ン、其ノ詩ニ曰、既ニ見ニ君子一、云ニ胡ノ不レ喜ヒ、會則霽レ、別レテ而噫ヒ、處女ノ之情也、心鏡佛語、纏ニ綿ノ四肢一、綢ニ繆シ百骸一、不レ可ニ須臾モ離ル也、可キ離非レ情ニ也、故ニ霎時不レ來、疑惑忽生ス、雖モ霽レ復ル噫ヒ、死而後已ム、然ラバ則何ノ益、誰カ謂フ人ノ性善ヲ、或曰惡、予於レ是ニ見ニ人之性、同一致、無ニ善惡一、

君は松ぶし私はこふろぎと
いひて鈴蟲ふりすつる

松蟲蟲ノ名、松與レ待同、蟋蟀、不無相通ス、與來相近レ、鈴蟲、其音鈴々、如レ振フ金策一、因テ名ヅク焉、此歌戲謔之辭、且無用之言、

君は我身を秋蟲にても
またぞこふろぎ時々に

前篇之對、其意屈曲、秋與レ飽同、蟋蟀猶ヒ曰カ來ト也、假リ辞ヲ於鳥獸草木、及ビ寒暑四時ニ、多下遣ニ宿懷ヲ、攄ニ畜思ヲ者上、

花に短冊つけるはよいが
餘所に主有る枝おるな

戀語也、男女嬉遊シ、諷ニ諫シ情人ヲ、使ニ之ヲ解語ヲ、蓋シ情之易レ通シ、無下近ニ於色一者上、速ニ郵之傳ヲ命ヲ、

君はさやけさ十六夜月よ
私は廿日の月をまつ

月着同、十六夜ノ月、出ル於戌時一、其ノ來ル則夙ヒ、恐ニ人之知ルコトヲ也、二十夜ノ月、出ル於亥時一、將ニ寢レ之時此隱語也、如ニ謂カ月有ニ二一、而實爲ニ同月一、是妙入ル神之處、豈ニ欲レ莫而不レ願ハ夙ヒ哉、以下十六與ニ二十一之月上倒語シ論ス時之遲速一、微ニ而顯、婉ニ而成ス章ヲ也、

君はうぐひす私はほとゝぎす
誰もはつねの身を痩す

君ハ者鶯、宇與レ憂音同、喻ス憂心有ルニ忡ルコト、言ニ憂心悄々、慍ニ于群小一也、郭公、輔士者、熱焦之貞、女子過レ時ヲ不レ嫁之言也、初音、初寢同、身痩、憔悴枯槁、不レ勝ニ憂苦一、紅顏美少之男女、始テ相通シ、輾轉反側シ、相共ニ悟語シ、憂樂相半シ、俱ニ恐ニ他人之姦ヲ、疑信戰ニ于胸中一、宜ク乎憔悴、飲食不下レ喉、

わきてつらきは山杜鵑
聲も形もいづこぞや

遠ク不レ若レ邇ニ、離ル不レ若レ會ニ、會ス則娛樂シ、遠ケレ則憂苦ス、此歌、有リ乖ニ迕スル於彼カ心一、其家ノ隣、其人ノ隔、所レ謂堂上遠ク於百里一、堂下遠ニ於千里一、門廷遠ニ於萬里一、歎ニ欲レ見レ而不レ見也、杜鵑有リ二種一、其一ハ冲レ天ニ飛鳴ス、其一ハ隱ニ於茂樹一、其聲聞ヘテ而形不レ可レ見ル、山杜鵑蓋シ謂フ此乎、

ぞふかかふかの待夜の所作に
來る歟こぬかの疊算

疊ハ席也、手持ニ烟管一、放ツ之ヲ席上一、俯セ則來ル、仰ケ則不レ來、算ハ猶ホ占也、蓋シ雞卜唾占之類也、又無心ニノ推ニ指ヲ於席上一、數フ其目一、目偶則來、奇則不レ來、待之切ナレ、占ニ來不來一、人情所レ宜キ、然也、

桔梗の手拭おとせばひろふ
直に受れば人が居る

桔梗ハ草名、花色紫翠、可ニ甚ダ愛憐ス一、擬ニ爲ニ染色ト、美女紅白之顏、尙ホ之ニ以ニ桔梗之手拭ヲ人觀レ之ヲ、

皆曰レフ好ト、遺セバ路ニ則拾フ之ヲ、直ニ受レバ則人知レ之、巧詐似レ淺ニ、而其意深遠也、直易レ折之語、折ハ恐レ人之誰何ニ、或ハ曰、直猶レ親也、受讀テ爲レ授ト、言ハ男女不ニ親授ニ、陽ハニ執レ禮、而陰ニ行レ邪ヲ也、

富士之什十首々二十六言

ことばん引ゝせ　晝寢の夢に

白と黑との智慧くらべ

夢裡爭ヒ術ヲ、互ニ競フ風流ヲ、以相歡娛ス、古人有下晝寢テ、而夢ニ遊ニ於華胥ノ國ニ者上、神遊ニ而已、是亦神爭ナリ也、豈ニ容ニレンヤ勝負ヲ於其ノ間ニ哉、不レ知レ喜ニ勝チ不レ知レ怒ニ負ヲ、不ニ亦樂ニカラ乎、

紺のふくさに鬢伽羅こめて

おとす振にて君にやる

紺色ノ方巾、裏レ物ヲ之絹、納ニ鬢奇羅ヲ、而伴遺ヒ以贈ニ情人ニ也、此亦前篇ノ之答、鬢奇羅、謂ニ香嚢ヲ也、以調スレ鬢ヲ者、己既ニ用ヒ之ヲ、有レ餘リ而贈ル之ヲ、納者ハ裏而緘レ之ヲ、遺者與フ之、伴遺ノ而實ハ與也、程の有とは戀路じやないぞ

近き遠きはいはぬこと

非レ言ニ遠近險易ヲ也、執レ志純一、何ヲ爲カ不レ成ヲ、吉行百里、軍行三十里、足行有レ程也、戀路無レ程也、何ナレ則行不レ以レ足ヲ而以スル情ヲ也、越俗謂ニ陰莖ヲ爲ニ中ノ趾ト、以レ居ニ左右両大足ノ之中ニ也、言ヒ中趾ノ所レ行ク、不レ知ニ幾千萬里ニ、其ノ怒ノ之發スル、山河ノ之險不レ足レ畏ルニ也、盜賊ノ之難、不レ足レ憚ルニ也、雷霆ノ之激スル、不レ足レ恐ルニ也、風雨ノ之烈、不レ足レ苦ムニ也、足力何ソ得レ及コトル焉、故ニ萬金ノ之產、可レ破ル也、千里ノ之郭、可レ崩ス也、百乘之家、可レ傾ク也、雖モ有リ湯池鐵城ニ、不レ繫セ中趾ヲ者ハ亡、雖ニ囷倉實ヲ、府庫充ツ、不レ維ニ中趾ヲ者ハ滅フ、子侮ニ其ノ親ヲ、臣叛キ其王ニ、父放ニ其ノ子ヲ、已レ縊ニ其ノ首ヲ、皆繫維ノ之不レ固カラ、暴怒ノ之不レ制セ、而從ヘ中趾ノ之欲ニ也、或ハ曰、心ノ之在レ體、君ノ之位也、九竅ノ之有レ職、官ノ之分也、其君令シ、其官從フ、君不レ敬セ位ヲ、失ニ其ノ體ヲ、非ニ中趾ノ之所ニ知ル也、詩ニ曰、誰カ謂フ宋遠ト、曾テ不レ崇レ朝ヲ、蓋衛趾ルコト宋ヲ、數百里、思テ而不レ止ト、其レ何ノ遠カ之有ン、行カ則至ン、是レ亦戀路也、論スルハ遠近ノ安ナル哉、

あかね染には藍にて重ぬ

色の深きをこひといふ

茜、不レ厭同、藍逢同、戀慕ノ之甚キヲ曰レ情ト、情濃同、欲ニルノ相久カラント之詞、

戀をするあら猩猩緋染め

たとひ朽ても色さめぬ

猩猩緋染、染色名、猩與レ生音同、言猩々之血、取以染レ繒ヲ、繒敝レ色不レ渝ラ、與スル者ハ、與レ子偕ニ老ン、イルルマデ之レ死ニ矣ヲ靡レ它、百歲ノ之後、歸ニ于其ノ居ニ、死テハ則同レ穴、生生相從ハン、讀曲懊惱ノ之歌、皆斯ノ意、未レ知ラ文生ニ於情ニ、情生下スルコトヲ於文上、使ニ人ヲ悽然トシテ、增ニ伉儷ノ之重ヲ、古今ノ之人情、無下不レ踐ニ此ノ域ヲ者上、

戀をするあら露草染に

藍の重なる深き色

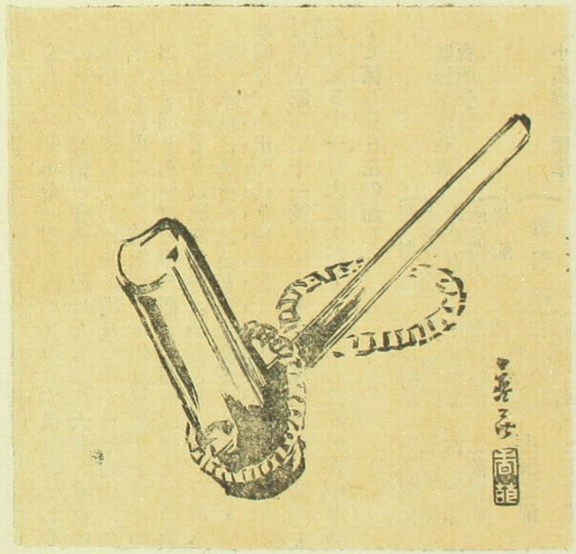
露草ハ、染色ノ之名、三ヒ以ニ藍汁ヲ湛レ之ヲ、其ノ色好雅、尤モ可レ愛也、藍愛同、湛スレ繒ヲ一再、而重ヌルニ之ヲ斯ニ三ナレハ、則其ノ染色ノ之深、敝レ色不レ渝ラ、以喻スルニ他人ノ欲シテ姦レ之ヲ、而愛スレ偶ヲ之深、不レ能ハ姦スルコトヲ也、

雪にありたや函根の雪に

とけて流れてけわひ水

函根、在ニ二摸州ニ、與ニ伊豆州ニ境フ、設ケ關ヲ、消、氷釋ル也、假粧坂、在ニ相摸州ニ、妓女ノ窟、古者有ニ虎少將ナル者ニ、美人也、曾我五郎時宗愛レ之ヲ、相憐ミ將スレ死ント、後人欽レ之ヲ、開ニ之ヲ古老ニ、曰ク、時宗遭ニ世ノ之喪亂ニ、爲レ飾ニ矛戟甲鎧ヲ、欲レ得ニ三百金ヲ、然レ金非レ降ニ於天ニ、非レ湧ク於地ニ、筋力勤苦ノ之所得ル也、偸樂苟且之非ニ所ニ得ル也、千謀百慮、不レ知レ所ニ出サン焉、虎少將聞テ之ヲ、有レ感ニ感ル「於其ノ心ニ撞ニ無間ノ之鐘ニ、而要ス之ヲ、傳ヘ云、撞ニ其ノ鐘ニ者ハ、忽得ニ其ノ所レ欲ス之物ヲ、雖レ然ト終身償ヒ其責ヲ、不レ得レ安ニ其心ニ、不レ在レ遠ニ、即チ在レ此ニ非レ有下鐘ノ名ニ無間ニ者上、心專ニ志一ナレハ、則所ノ撞之物、皆ナ爲ニ無間ニ、金石匏土、絲竹革木、無ニ物トシテ非ニ其ノ鐘ニ、又云、無間ハ、地獄ノ之名、執ルノ志之純ナ、精通ニ於地獄ニ、釜爲ニ之ヲ碎ク、金爲ニ之ヲ出ス、故ニ身死ノ而魂沈ニ於無間地獄ニ、服ニ其罪ニ雖ニ有ト其名ニ、無下行ニ其ノ實ヲ者上、虎少將把テ拗ヲ擊ツニ洗水鉢ヲ、其ノ音鏗然、其ノ母在ニ樓上ニ、見ニ其苦困スルヲ、不レ勝ニ感動ニ、擲ニ三百金ヲ、散ニ亂ス空中ニ、三ニ金於此ニ、五ニ金於彼ニ、終贖ヒ其ノ所レ質トスル之物ヲ、又飾ニ矛戟甲鎧ヲ、以爲ニ軍容ヲ、或ハ曰撞ク無間鐘ヲ者ハ、美人千鳥ニ、非ト虎少將ニ矣、千鳥憂下梶原源太景季、無ニ三百之金ニ而ノ狼狽急遽スルヲ、然レ無ニ所レ求ムル焉、褰ケ長袖ヲ、禱リ上下之神祇ニ舉テ杓ヲ擊ツ石盤ヲ、相離テ生レ火ヲ、金下リ於高樓ヨリ、飛火交リ黃金ニ、飄ルニ於簷前ニ、輝ク於盤上ニ、於レ是乎千鳥其ノ喜可レ知ル也、諸子ノ所レ傳、

多シ齟牾スル者ハ、未ダ知ニ孰カ是ナルヲ、斯ノ歌男子ノ之辭、所レ思住ニス假粧坂ニ、已レ爲ニ函根山ノ白雲ト、春風水釋ク、遂ニ桃花水ヲ、流テ到ニル美人ノ之所ニ也、其ノ情甚タ鄙、其ノ詞甚タ都、有ニテ妖冶之閑雅ヲ、無シ君子ノ之操行ヲ、



恭愛之什十首首二十六言（大尾）

以下全て

白　紙